



報告資料

「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会

第5回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008発表会

■平成21年3月7日（土） 草月ホール■

主催：認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008実行委員会



当日プログラム

◆第1部(第5回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議)

議事	発表者
1. 開会挨拶	堀田 力／認知症になっても安心して暮らせる町づくり 100人会議議長
2. 来賓挨拶	宮島俊彦／厚生労働省老健局長
3. シンポジウム 『認知症を知り 地域をつくる』キャンペーンの歩み ～町づくりの今、そして今後に向けて 1)映像－「認知症を知り 地域をつくる」現場から 2)座談会－ご本人・ご家族が安心して暮らせる町 の実現に向けて	吉田民治さん／平成16年に若年性認知症と診断される (京都府宇治市) 吉田照美さん／父、民治さんを同居介護中 吉田一平さん／ゴジカラ村代表(愛知県) 館石宗隆さん／札幌市福祉保健局保健所長 ・元厚生労働省老健局計画課課長補佐 堀田 力／100人会議議長 進行 村田幸子／福祉ジャーナリスト、100人会議会員

◆第2部(「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2008 発表会)

議事	発表者
1. 「町づくり 2008 モデル」の経過報告	長谷川和夫／「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2008 実行委員長
2. 「町づくり 2008 モデル」表彰	長谷川和夫／「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2008 実行委員長
3. 「町づくり 2008 モデル」発表と紹介	インタビュー 町永俊雄／NHKキャスター ・町づくりキャンペーン 2008 地域活動推薦委員
1)「仲間と共に、若年認知症をイキイキと！」	1) 若年認知症グループ どんどん (神奈川県川崎市)
2)「公立中学校の空き教室・花壇を住民(認知症者を 含む)と中学生が協働作業を通して認知症を正しく 理解する」	2) 社会福祉法人 リデルライトホーム (熊本県熊本市)
3)「認知症メモリーウオーク・千葉」	3) 第2回 認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会 (千葉県)
4)「目黒たけのこ流・認知症ネットワーキング」	4) 目黒認知症家族会 たけのこ (東京都目黒区)
5)「親父パーティーが地域を変える！～認知症地域資 源ネットワーク『NICE!藤井寺』の構築～」	5) 社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会 (大阪府藤井寺市)
6)「であう・ふれあう・わかちあう 認知症の人の見守り 支援『あんしんメイト』」	6) NPO法人 認知症サポートわかやま (和歌山県和歌山市)
7)「地域と共に歩む老人ホームを目指して」	7) 社会福祉法人 ゆうなの会 特別養護老人ホーム大名 (沖縄県那覇市)
本日のまとめ	堀田 力／100人会議議長、 町づくりキャンペーン 2008 地域活動推薦委員長

(閉会後に、ホール内にて第2部の受賞者と来場者による交流会を実施)

目 次

当日プログラム

I. 第1部「第5回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」	
1. 開会挨拶	3
2. 来賓挨拶	5
3. シンポジウム「『認知症を知り 地域をつくる』キャンペーンの歩み ～町づくりの今、そして今後に向けて」	
1) 映像－「認知症を知り 地域をつくる」現場から	6
2) 座談会－ご本人・ご家族が安心して暮らせる町の実現に向けて	8
II. 第2部「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2008発表会」	
1. 「町づくり2008モデル」の経過報告	19
2. 全国から寄せられた地域活動一覧（応募先着順）	20
3. 「町づくり2008モデル」表彰	24
4. 「町づくり2008モデル」7団体による発表	26
III. 本日のまとめ	38
IV. 平成20年度の活動	
1. 「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの事業（概要）	39
2. 「『認知症サポーター100万人キャラバン』～認知症サポーター養成講座」 実施状況	40
3. 「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2008」（概要）	48
4. 「認知症の人『本人ネットワーク』支援」活動報告	50
5. 「認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進」活動報告	58
6. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議の啓発・普及活動	66
V. 資料	
1. 「認知症を知り 地域をつくる10ヵ年」の構想	67
2. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議の役割	68
3. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議会員一覧	69
4. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議 参加リスト	70

I. 第1部「第5回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」

1. 開会挨拶

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議議長 堀田 力

土曜日の晴れの午後にも関わらず、これだけの数の皆様、2階まで満席であります。ご参加頂きまして心から感謝いたします。この100人会議、そして我々の活動が始まりましたのは平成17年でありまして、本日100人会議の方にも参加頂いていますが、民間諸団体の皆様と一緒に、日本のすべての地域を、認知症になっても安心して暮らせる町にしていきたいということで、これまでやってきております。



一つたてました目標が、「認知症を知り 地域をつくるキャンペーン」でして、10年間で日本中をそうしたいということでスタートいたしましたが、次年度がちょうど節目の中間年になります。

10年をめどに4つの事業に取り組んでいますが、その1つ目が最初から重点をおいてやってまいりました認知症サポーター100万人キャラバンであります。皆様、このオレンジリングをつけて頂いていると思いますが、まず認知症への理解を深めてもらおうということで、認知症になってもその能力を存分に生かして普通の生活、普通の尊厳ある人としての生活を最後までして頂こう、それを支えていこうという、認知症サポーターの方々が100万人に達するという目標の事業で、ちょうど中間年5年次を迎えます。最初始める時、目標は大きくなくてはいけなけれど100万人というのは大きすぎるのではなかろうかという声もありましたが、もう4年次にしまして72万人ですから、突破する事は間違いない。本当にすばらしいご理解を皆様方に頂戴いたしている、そしてその講師役をつとめますキャラバンメイトも順調に育っております。こういうヒトづくり、これが1つ目の事業です。

2つ目の事業は「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン、大変長いので「町キャン」と省略していますが、町をつくろうというキャンペーンでありまして、今日も町づくりの2008モデルが紹介されますが、そのように各地域で認知症の方を受け入れるいろいろな活動が展開されています。第2部でモデル活動を知って頂きたいのですが、これが町づくり、2つ目の事業であります。

それから本人ネットワーク事業ですが、まずは本人にその思いを語っていただくという事業です。これが理解の一番の基礎であります。それがいままでなかなかできなかったのに、ある程度までまいりました。次の座談会にもご本人の方に登場いただきます。そういう風にして本人が自然に語れる、自然に受け入れられる社会にしていきたいということであります。

4つ目がケアマネジメントの推進です。認知症の方に対応したその方にふさわしいケアマネジメントをすすめようという動きで、メニューを用意している事業であります。

そういう風にいろいろな面から認知症の理解を深め、安心して暮らせる町にする事業に取り組んでおりますけれども、私どもが想像していた以上の大きな参加、協力、進展があります。これはもちろん事務局の方々、100人会議会員の方々、いろいろな方々が一所懸命やって下さっているのもありますけれども、それだけではなくて、これだけ広がりを見せるというのは、私たちみんなの中に、認知症というのは、いってみれば社会としては新しい体験、長寿社会になって経験する新しい体験で、しっかりとだれもが幸せになるようにしたいけれど、そうするためにはまだまだみんなが努力しなければならないという認識が広がっていることがあります。だからこそこれだけの力になり、活動が展開しているんだという風に思います。

展開ぶりは本当にすばらしく、皆さん方の力に感謝するばかりですが、まだ道としては半ば、まだまだしなければいけないことがいっぱいあります。私どもはいってみれば外側から社会づくりをやっておりますが、本人の内側から本人にかかわって本人のための判断をする成年後見制度、これをすべての認知症の方々に、しかもできれば家族の方ではなくて第三者が純粋に本人の立場でやれるように、そこまでいきわたるところまで進みたい、そのようにして本人を支える仕組みをしっかりといきわたらせながら、それを外側からしっかり受け入れていきたいと考えています。私どもは町として受け入れていこうというのでありますが、介護保険の中でも認知症の方々をどういうやり方で受け入れるか、必ずしもこれは全て解決されているわけではなく、そちらの開発もまだまだあろうと思います。そのようにして、いろいろな面から認知症になっても人間として安心できる社会にするために、みんなでこれからもがんばって腰をすえて取り組んでいきたいと思います。

本日の会が、ちょうど中間年に至る段階として前に進む大きな礎となればうれしいと思います。どうもありがとうございました。

2. 来賓挨拶

厚生労働省老健局長 宮島俊彦

みなさま、こんにちは。

まずは、堀田議長をはじめとする皆様方におかれましては、日頃から認知症の方とご家族の支援にご尽力を賜わり、誠にありがとうございます。

今、全国で認知症の方が170万人おられ、平成27年には250万人になるといわれております。又、最近では若年性認知症の方への社会的な関心も集まっております。昨年、厚生労働省では「認知症の医療と生活の質を高める緊急プロジェクト」を設置して、予算や介護報酬にも認知症対策として色々と反映いたしました。ただ、まだいろいろ問題があることは事実です。



たとえば医療に関しては、認知症の方が肺炎になって入院しようとしたら断わられた、専門医の人が少ない、BPSDを適切に治療している医者がいないのではないかなど、さまざまな問題があります。介護に関しても、ケアの質の格差が激しい、ケアの標準化がされていない、ケアマネージャーでも認知症の理解がすすんでいないなどの問題があります。行政に関しても、自治体による格差が大きい、職員が2年で異動してしまうので継続的な対策ができない、地域包括支援センターも介護予防に忙殺され認知症対策が弱いなど、いろいろなことがいわれています。

このようにさまざまな問題がありますが、一つ一つ対応していかなければならないと思います。そうしなければ、この認知症対策というのはなかなか実を結んでいけないと思います。

先程、「認知症を知り地域をつくる」キャンペーンが平成17年度から始まり、認知症サポーターが72万人になったと報告がありましたが、実は厚生労働省でも先月、この認知症サポーター講座を開催いたしました。講堂で開催しましたが、予想を超え300人が集まりました。厚生労働省の職員の中にも、認知症の方が身近にいるなど関心のある人が多いということを改めて認識した次第です。

認知症はだれでもなる可能性がある病気ですし、周囲の理解と地域の支えというのが大事です。私自身、身近な人が認知症なのですが認知症になってもつきあってくれる人がいるというのは大変助かります。認知症になってしまうと社会生活、特に外に出ていく生活が段々とできなくなってしまうことがあります。そこを支えてもらえるというのは大変ありがたいことだと思います。

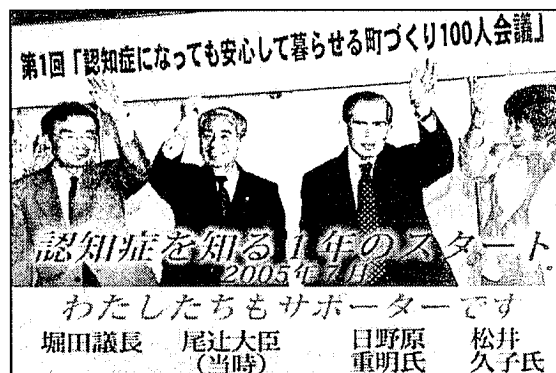
今日は町づくりのモデルとして受賞された方からの発表もございますので、私も楽しみに聴かせて頂きたいと思っています。厚生労働省としまして、みなさまと一緒に認知症の方々や家族を支える取り組みを全力ですすめてまいりたいと思います。これからのみなさまの一層のご協力をお願いしまして、本日のご挨拶とさせていただきます。

3. シンポジウム 『認知症を知り 地域をつくる』キャンペーンの歩み ～町づくりの今、そして今後に向けて～

1) 映像－「認知症を知り 地域をつくる」現場から

平成 17 年度から「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンはスタートしました。
この4年間をかけてどんなことがすすんできたのか、その一部を映像でご覧いただきました。

(以下抜粋)



○仲間とともに

－認知症の人「本人ネットワーク支援」



○広がるサポーターの輪

－認知症サポーター100万人キャラバン



○ともに暮らす町を

－「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン



○この町で、自分らしく、いつまでも

－認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進



「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの歩み

(平成16年度)

■国際アルツハイマー病協会・京都会議 H16/10/15-17

ー本人による発言:越智俊二氏、クリスティーン・プライデン氏

※「痴呆の人とともに暮らす町づくり」キャンペーン(町づくりキャンペーン初回)

■痴呆から認知症への名称変更 H16/12/24

平成17年度

●第1回100人会議
(キックオフ)
H17/7/8

会員数 82

- ・「認知症を知る1年」(キャンペーン 開始)
- ・趣旨に賛同する個人・団体の会員参加
- ・啓発活動(ホームページ、リーフレット配布)

土台づくり

サポーター数
21,913人
H18/1/26現在

●第2回100人会議
H18/2/4 (報告会)

会員数 96

平成18年度

- ・認知症の人「本人会議」の開催 **本人会議アピール**
- ・会員が取り組みへ協力 (企業団体のサポーター講座等)
- * マスコミとの連携(NHK認知症キャンペーン、映画「明日の記憶」「そうかもしれない」ほか)

町づくりがめざすもの=認知症の人の声

サポーター数
117,226人
H19/1/5現在

●第3回100人会議
H19/3/3 (報告会)

会員数 100

平成19年度

- ・認知症地域支援体制構築等推進事業との連携
- * 海外への情報発信(英語版リーフレット作成→ホームページおよび国際シンポジウムを通じた海外への紹介)

取り組みの広がり=「認知症新時代」へ

サポーター数
360,781人
H20/1/10現在

●第4回100人会議
H20/3/1 (報告会)

会員数 100

平成20年度

- ・町づくり事例データベースの整備
⇒ホームページ<検索サイト>のオープン
- ・認知症地域支援体制構築等推進事業との相互協力
(情報提供⇒成果フィードバック)

取り組みの蓄積→全国各地への波及

サポーター数
723,368人
H20/12/10現在

●第5回100人会議
H21/3/7 (報告会)

会員数 100

平成21年度

新たなステージへ

「認知症を知り 地域をつくる10ヵ年」中間年

2) 座談会―「ご本人・ご家族が安心して暮らせる町の実現に向けて」

吉田民治さん(平成 17 年に若年性認知症と診断される)

吉田照美さん(民治さんを同居介護)

吉田一平さん(ゴジカラ村 代表)

館石宗隆さん(札幌市福祉保健局保健所長、元・厚生労働省老健局計画課課長補佐)

堀田 力(100 人会議議長)

＜進行＞村田幸子(100 人会議会員、福祉ジャーナリスト)

※吉田さん一家と、吉田一平さんは名字が同じため、以下お名前でご紹介させていただきます。



村田 幸子

福祉ジャーナリスト。100人会議会員

立教大学英米文学科卒業、NHKにアナウンサーとして入局。スタジオ102、NHKニュースワイドなど報道番組のキャスター・リポーターなどを経て、NHK解説委員(厚生行政担当)をつとめた。現在は福祉ジャーナリストとして、全国各地の認知症介護・福祉の現場を精力的に取材している。

村田◇今、写真でこの4年間の歩みをご覧いただきましたが、わずか4年の間に認知症に対する理解、動きが急激に進んできた実感いたします。

そうはいっても、まだまだご本人、ご家族が安心して地域で暮らし続けていけるかというと、全国津々浦々そうなのは 아닙니다。もう一歩も二歩も力を入れてすすめていかなければならないと感じます。こんな町になったら安心して住めるのに、こういう心をもった人が増えていったらご本人もご家族も安心して住めるのに。こんな町、地域を実現していくためにはどうしたらよいか、この先の活動に向けて少し夢を語ってみたいと思います。

●してもらうこと、してあげること

村田◇吉田民治さん、こんにちは。今日は京都府宇治市からお越しいただきました。3月4日がお誕生日だったそうですね。おめでとうございます。

民治◇ありがとうございます(会場、拍手)。

村田◇おいくつになられましたか。

民治◇70歳ちょうどです。

村田◇ご家族からお祝いはありましたか。

民治◇ケーキと赤飯をもらいました。もっとほしかったね(会場、笑)。

村田◇お孫さんは何人いらっしゃいますか。

民治◇孫は一人です。一緒に暮らしています。

村田◇お孫さんとの関係は、日常的にどのような感じですか。



吉田 民治さん

平成 16 年に若年性認知症と診断を受ける。現在 70 歳。

長年、電気設備工事業と電気店を経営していたが、平成 10 年夏頃から頭痛の頻度が上がり、明らかに物忘れが増え、温かな性格が短気で投げやりとなり、閉じこもりがちになる。不安や自信喪失で仕事を断ることも増える。

平成 10 年、15 年にも検査を受けるが病気はみつからず平成 16 年、65 歳にて、若年性認知症と診断される。

「認知症についてざくばらんに語れる場を増やしたい」と各地の講演会やテレビ取材などで、認知症について語りつづけている。現在、要介護2。

民治◆ぼくと一緒に、ぼくをフォローするような感じで。道路を歩いても手伝ってくれますし、家におっても手伝ってくれます。ぼくが駅なんかでね、切符を出すのを忘れたり、(切符を)通して取らないとかね、そういうのを全部、気いつこうてやってくれるんです。うれしいですね。

村田◆民治さんはお孫さんにどういうことをしてさしあげるのですか。

民治◆水頭症をわずらって手術をしてちょうど1年です。病院から足腰をきたえるために歩け歩け、といわれるんですよ。だけど歩くのは大変なんです。朝だけ、調子がよかったら(通学する孫を)バスに乗って連れていくというか、連れられていくというか(笑)、そういう感じでトレーニングがてら歩いています。自分の運動にもなるけど、帰ってきたらぐったりします。帰り道をまちがえることもあります。

村田◆帰り道をまちがえたらどうしますか。

民治◆間違えたら、気がついたところでもう一度考えるんです。そして道の順番を考えて、こっちいけば帰れるという図面が(頭に)出てきたら、また歩いて帰ります。それが無い時はまたもういっぺん戻って、いつも通りなれている道へ帰っていきます。

村田◆工夫をご自分でしてらっしゃるんですね。大事にいたったことはありませんか。

民治◆今のところは自分ではないと思うんですよ(笑)。



●子どもと二人でおじいちゃんの病気をうけとめる

村田◆とても和やかに暮らしておられるようですね。娘さんからみてどうですか。

照美◆和やかってこともないですね(笑)。家の中にいてモノがなくなったときに、自分がなくしたとは思わず、だれかが移動したと人のせいにする。そういうことが非常に多いので、孫に対して「お前どこにやってん」、私に

に対して「どこや」といいますね。

以前は人のせいにすることがすごく多かったのですが、機嫌がいいと自分がなくしたと自覚がもてるんです。機嫌がいい時だけはそうにおさまるので何とかなるんですけど、人のせいにされると私たち、必死に探さないといけない。それはちょっと大変です。

吉田 照美さん

父、民治さんを、主に医療の手助けをかりて自宅で介護。

若年で様々な病気を発症し介護を必要とする方の為のデイを作りたいと考え、通信制大学で学びながら、家事、育児、介護をこなしている。自身慢性腎炎を診断されて23年で、療養生活中でもある。講演会やテレビ取材でも父をサポートしている。

昨年末より地元で若年性認知症の方を中心とした認知症交流会を月一回主催。さらに、「認知症友の会」を立ち上げ、「孤独大敵」をテーマに仲間の輪を広げている。

村田◆そういう対応は大人ならできるかもしれませんが、照美さんのお子さんである、お孫さんのせいにされたらどうしますか。

照美◆「また、おじいちゃんがいうてるわー」っていいにきますね(笑)。仕方がないので、おじいちゃんにちょっと怒られつつ探してみたり。子どもなりに受けとめて、なんか耐えている。でも「いつものこと」といいます。おじいちゃんはそのような病気やし、仕方がない、と受け入れて、そんなに苦痛には思っていないみたいです。

村田◆そういうお孫さんの態度は、自然にとるようになったんですか。

照美◆そうです。

村田◆お母様がそういう話をされたとか。

照美◆ないですね。おじいちゃんは忘れる病気やし、人のせいにする病気やし、と徐々に覚えてそれが当たり前の暮らしになっています。私だけで受けとめるのはしんどいが、二人いるから、「あー、またいうてるなあ」「またおじいちゃん何か探してるで」「また私らのせいにしてるわ」と二人で言って、そうやってこそこそと言ってるのをおじいちゃんが見て笑ってます。孫がいる分、和やかにすすむところはあります。

村田◆そういう笑える関係ができるまでに、相当長い間の葛藤がおありになった、と。

照美◆そうですね。子どもが2歳以下のときにはそういう会話が成立しないですし、子どももおじいちゃんに叩かれてしまったりすることがあったりして、なんで叩かれたのか子どもには理解できん、と。おじいちゃんには何かの思いがあり、強くするつもりもないけど子どもが突き飛ばされることがあったりして、その時期はちょっとつらい思いをしました。けれども、3歳、4歳になって会話ができるようになってからは、意思の疎通ができ、本人なりにこれは病気のせいだって理解できて、矛盾したことされているという思いがなくなった。腑に落ちたみたいですね。

●ご近所との関わりで感じること

照美◆テレビに出たことでご近所の皆さんはご存じなんですね。放送があるたび「テレビみたよ」とかいわれるんですが、助けられたということもなく、会ったときに挨拶や世間話をして、「おじいちゃん全然（認知症に）みえへんのにどこがどうなんの」「私たちももの忘れとかするけれどどう違うの」と、すごく言われます。

村田◆単なるもの忘れじゃないのか、認知症とどう違うのか、と。

照美◆はい。見た目もわからないし、世間話もできるし、いったいどこがどう悪いのって、しょっちゅういわれますね。

村田◆お父様の民治さんも上手にご近所の方とお付き合いされるのですか。

照美◆挨拶とか普通にしてますし、世間話でも「そういえば昨日ニュースあったね」と普通にしゃべるので、全然認知症だと感じないと皆さんおっしゃるんです。

村田◆民治さん、ご近所の方とのおつきあいやお話は苦痛でなく楽しくしておられますか。

民治◆ええ。顔をみてこんにちは、と言うてくれはる人には「こんにちは」と言うて挨拶します。だけど相手の方が私に何を質問していいのか先入観があるもので、質問がなかなかやってこないんですよ。ね（娘とうなづく）。それで、ぼくから「子どもさん、どうしてはりますか」ときくと、しゃべってもらえるんですよ。相手さんから私に聴くというのは、失礼な質問の仕方になるとかね、気いつかっている面がものすごくあります。

村田◆そういうこと、お感じになるのですか。何か相手が自分に気をつかってるなあ。

民治◆わかりますね。だから、会ってもほとんどの人は「こんにちは」くらいですね。

村田◆もっとどういう風に接してほしいですか。

民治◆こういう病気を地域の皆にわかってもらって「ぼーっとして家にいるんだったら出てきなさい」と、そういう声がほしいと思います。声かけてもらうだけでも十分なんです。私をみてもらえるという安心感があります。どこのだれかわからんという風に私になっっていくんだからね。声かけてもらえることによって、ぱっとその人を思い出せる。やはり声はかけてほしいです。ついでに「お茶でも飲みに来いへんか」と（会場、笑）、言ってくれたらうれしい話ですわ。

●ホームステイの受け入れが日々の暮らしの刺激に

村田◆ラブラドル・レトリバーと一緒に写った名刺をいただきましたが、盲導犬になる犬を預かっておられる、と。また、外国の方のホームステイを受け入れているそうですね。

民治◆そうです。ホームステイの方も毎年のようにね。多いときは1年に3人か4人くらい来はったかな。ほんまに何人来たか、わからないです（笑）。

村田◆どういう所の方が来られますか。

民治◆フランスの人やね。困ったことに、顔をみたらアメリカ人、しゃべったらフランス人。ようわからんのですわ（笑）。

照美◆ホームステイは父が発症する前後から、もう16年続けています。毎年最低1回はお引き受けしています。父の病気が進行してきて、学校側に続けていいですかといったら「アルツハイマーくらいいいですよ」（笑）とっていただきました。進行がゆるやかで会話能力も高くして学生さん自身も違和感がそんなにないし、まだいいですよ、ということで続けさせてもらっています。

留学生が来るたびに名前もろくに覚えられないですが、毎日「今日はどこにいったん」「今日は金閣寺、銀閣寺」という話を夕飯のときにしています。父も「金閣寺ってこういうとこや」と京都の観光名所について、その子としゃべるんですね。標準語で日本語を習ってきた子なので、関西弁と通じないんですが（笑）やりとりしています。

フランスの留学生でいい子が来て、ちょうど4年前、招待されて、フランスに一週間ほど行きました。「病気もあるし、人生最後の海外旅行や」と行って行ったのに、帰ってきたら「大丈夫や、またいける」というんですよ（笑）。いい刺激をもらっています。だから続けようと。

村田◆閉鎖的な暮らしではなくて外に門戸をひらいて、外からも入ってこられて、そういう雰囲気をつくっておられますね。積極的に考えておられることなのですか。

照美◆そうですね。一つの社会とのつながりですね。毎日の暮らしが同じことの繰り返しでは、父に対して刺激も少ないし、何にも興味をもたないんです。テレビだけみてボーッとしてます（笑）。それよりはと思って続けてきたことやし、続けようというところですね。

村田◆地元の金閣寺、銀閣寺ならホームステイの方よりずっとよくご存知ですしね。

照美◆最近行ったところは覚えていないのですが（笑）。古い記憶のほうがりっかりしているので、若いときにいったお寺や神社はたくさん覚えていま話をしていますね。

●感性を基礎に、人とのつながりをつくることが大事

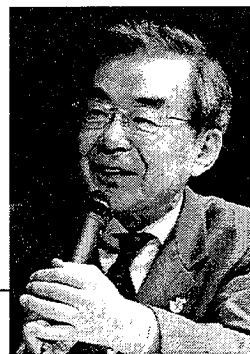
村田◆このようにご本人が発言するようになった結果、多くの方の理解が進むようになってきた。認知症とは何かということが実感としてわかるようになったというのもこの4年間の大きな動きですね。

堀田◆近所の方とのつながりは大事ですよ。今伺っていると、ご近所の方のほうがり気をつかっておられる。そこを吉田さんがわかっていて、ご近所の方の感性よりも吉田さんの感性のほうがり上にいっておられます。

堀田 力

さわやか福祉財団理事長・弁護士。100人会議議長

京都大学法学部卒業後検事になる。法務省刑事局付検事、在米日本国大使館一等書記官を経て、昭和51年東京地検特捜部へ。検事としてロッキード事件等を担当する。その後、法務大臣官房人事課長、法務大臣官房長を歴任。平成3年に退職し「さわやか福祉推進センター（現さわやか福祉財団）」を設立。



さらにすばらしいのがお孫さんです。お孫さんも最初はわからなかったのが、「ああ、おじいちゃんはこうなんだ」と3歳でわかってしまって、お孫さんのほうが吉田さんのさらに上をいってますね。年齢に関わらず、また認知症であるないに関わらず、人間はすばらしい感性をもっていて、その感性でつながることが、その人らしく生きていく基礎になる。そのつながりをつくることが私たちの活動の一番の大事な点だと思います。オレンジリングも、私たちがわかってつながりますよ、という気持ちの象徴です。感性が維持されればその人らしく生きられる。民治さんのお話を本当にうれしくうかがいました。

村田◇ご近所の方のほうが遠慮して、遠巻きにしているような雰囲気がありますよね。このへんがもう少し理解をすすめていかなければならないなというところかもしれません。



●普通の人として関われる社会環境が良い循環を生み出す

村田◇認知症に対する動きをどういう風にご覧になっておられますか。

館石◇堀田先生からもお話がありましたが、こんなに大勢の人の前にご本人が出てきてくださって、日頃の生活の中で「こんなことを感じたりしているんだよ」と堂々とお話してくださる。そのことをきっかけに認知症の人への理解が深まっていくという動きが、全国に広がっていると感じ

ています。また、吉田さんのお話の中で、自分が認知症だということがわかったと、相手に先入観が働いて、「きっと何もわからないだろう」と話をしてくれず、自分から話しはじめてやっと会話が成り立つことがある、という説明がありましたが、認知症の人は何もわからないとい

館石 宗隆さん

札幌市保健福祉局 保健所長 ・元厚生労働省老健局計画課課長補佐

旭川医大卒業後北海道庁に入庁。道内の保健所勤務を経て、平成9年から3年間、介護保険の施行準備に携わる。平成14年4月より厚生労働省 老健局計画課で認知症高齢者の支援対策や地域密着型サービスの基盤整備などを担当。平成20年より現職。

う先入観をもたないでみるのがいかに大切かとあらためてわかった気がします。医療の技術がすすんで非常に早い段階で認知症が見つかるようになってきましたが、まわりの人が偏見を持たず、認知症に対する正しい理解をもって普通の人として関われる社会環境ができてくると、良い循環がうまれるのだと感じました。

●認知症を問題にしている社会が問題、ゆっくりした社会へきりかえを

村田◇この4年間の動き、二人の話をきいてどんな感想をおもちですか。

一平◇私は23年くらい前に特養を、その後介護専門学校やグループホームを立ち上げましたが、今、若い職員も専門学校の先生も人間関係がうまくとれないことで一番悩んでいます。子どものときから体験していないか

吉田 一平さん

ゴジカラ村 代表

愛知県長久手町生まれ。15年間のサラリーマン生活の後、昭和56年、学校法人 吉田学園 愛知たいよう幼稚園を設立。その後、社会福祉法人 愛知たいようの杜、学校法人 吉田学園 もりのようちえん、学校法人 吉田学園 もりのがくえん（介護福祉科）を設立後、平成16年にゴジカラ村役場株式会社を立ち上げる。ゴジカラ村では、幼稚園、デイサービス・特養・グループホーム・ケアハウスなどの高齢者福祉施設、訪問介護・訪問看護の事業や、看護師・介護士養成の専門学校などが運営されている。



ら、全然できないんですね。

私は今日民治さんにお会いして、いろいろパソコンの話などもして、全然問題ないんじゃないかと。認知症を問題にしている社会が問題であって、むしろ今、問題なのは挨拶もできない、他の人の気持ちも汲めない社会のほうで、実はその社会が変わらなきゃいかん。このオレンジリングで、人間関係のとれない人たちを救うキャンペーンをやったらいいですね（会場、笑）。学校の成績が悪くても社会にでると普通につきあえる人もいます。ちょっと考え方を変えれば、もっと素敵な世の中がくると思います。認知症を治そうとがんばらない。がんばっているうちに私たちが疲れちゃうから、もうちょっと考えを変えたらいいのではないのでしょうか。

村田◆どういう風に考え方を変えましょうか。

一平◆私たちは急いでいるんですね。ゆっくりつきあえば、腹が立つこともないんですよ。同じことをなんべんもしゃべる方とずっと付き合っても、急いでないときは全然苦にならない。でも予定があったり、何かしようとするとうるさくなる。認知症の問題はもう一度私たちの社会が何か変わろうとする、そんなとっかかりになる気がしますね。

村田◆認知症を何とかしようばかり考えるのではなくて、むしろ認知症の問題を考えることによって社会全体を変えていくような流れにしていっていいのではないかと。

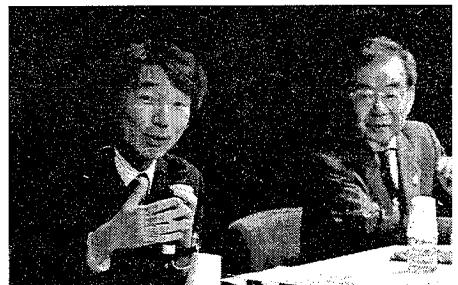
一平◆町づくりをしている地域の方々には、とにかくあわせてと伝えていきます。デンマークがいい、スウェーデンがいい、オーストラリアがいいと走り始めると、実は中身をおいてきぼりにしちゃうかもしれない。この4年間の活動でも、町づくりモデルの7つの活動をみても、役割と居場所づくりというのは、認知症の方ではなくて、私たちの居場所づくりをやってもらえるように感じます（会場、拍手）。

●町づくりはちょっとしたことから

館石◆介護保険がスタートして、認知症の方にできるだけ適したサービスをつくらうという流れが定着しました。まだまだ足りないとは思いますが、10年前と比較したらずいぶんさまざまなサービスが整えられてきています。さきほど、外国に優れた事例があるという話がでましたが、利用者さんの生活場面において、できるだけ地域とのつながりを切らないように配慮されているという点では、日本のグループホームの方がスウェーデンやデンマークよりむしろ優れている面もあると思います。今日も町づくりがテーマですが、グループホームなどの介護サービスを町づくりの中にどう位置づけるかというところにまで発想が進むと、さらにいい仕組みにできると思います。

村田◆そういうとっかかりをつくるためのヒントは何かありますか。

館石◆大げさに考える必要はないと思います。冒頭に流された映像資料でいろいろな取り組みが紹介されましたが、その中の一つ、富山県のグループホームの例が印象に残っています。グループホームで暮らす認知症のお年寄りや職員さんが、近くの通学路で小学生の保護のために乗り出したケースですが、認知症のお年寄りが周りから見守られる対象としてだけでなく、子供たちを守るために地域で活躍している姿が紹介されていました。グループホームをつくったときからそんなことを意識していたわけではなかったと思いますが、認知症の方がおられて、地域での暮らしを支援するためのグループホームができて、そこから子供たちを守ろうという活動につなが



ったわけです。これって立派な町づくりですよ。こういう取組が広がるといいなと思いました。
村田◇三重県桑名市のひかりの里というグループホームは学童保育と一緒にしていますが、徘徊するお年寄りがいて大変でした。それをみた理事長さんが認知症のお年寄りに町内パトロールをお願いしたら喜んでパトロールされた。そこでおっしゃったのが、一人ですれば徘徊、二人ですれば散歩、皆ですれば町内パトロール（笑）。

新興地域で、車上あらしや空き巣ねらいに悩まされていましたが認知症のお年寄りと職員が毎日お散歩して、すっかり減ってしまったそうです。これは町づくりですね。多分、町づくりしている、という気負った気持ちはないかもしれませんが、ごく当たり前のこと、お散歩するだけで変わっていくという、こういうのがありましたね。

堀田◇そうですね。認知症のグループホームが子どもを見守る事例が全国に広がってきましたね。見守りパトロールをするとご本人たちは生き生きするし、歩き回って夜ぐっすり眠れます。学校の先生も保護者も大喜びだし、町の人たちもグループホームがすばらしいと、それまでは冷たかったのが温かくなってくる。だから町がよくなってくる。ただ子どもたちが集団パトロールのおじいちゃん、おばあちゃんたちと仲良しになって、一緒に歩いていて家に帰らなくなっちゃって（笑）。認知症の方も他の皆さんと一緒にです。もっておられる能力がいっぱいあるから、それを生かすことによって地域がよくなる。本人も元気になる。そこだと思うんですよ。

村田◇そうですね。町の住人の意識が変わりますね。ひかりの里も、最初建設に大反対されたそうですが今や大歓迎。和やかに声をかけあったりしているような状況もあります。

一平さんの施設でも、町の様子が変わるなどの実体験があたりになりませんか。

一平◇ゴジカラ村では、お年寄りと一緒に OL や家族が住んでいます。福祉の分野だけでなく、不謹慎な分野も（笑）混ざって住むエリアを点在させています。混ざって暮らすところをつくると、町の中でまざるのと一緒に、立つ瀬が出てきます。親子だけで暮らすと腹が立つけれど、孫や他人がいるとちがいます。

今も新たに「だいたい村」を着工しています。ゴジカラ村はもっとゆっくり暮らそう、がテーマですが、だいたい村は、だいたい、というのをキーワードにしています。理事長が認知症になっても、だいたいでいいなら、問題はないだろうと（笑）。

●おじいちゃんといて楽しいと思うこと（民治さんのお孫さんの伊織くん、壇上へ）

村田◇どんなおじいちゃんですか。

伊織◇なんか、ちょっと忘れるってのが多い、おじいちゃん（会場、笑）。

村田◇ちょっと忘れることが多い。そういうとき、
どういう風にしてあげるの。

伊織◇探してあげる。

村田◇どんなものをよく探してあげますか。

伊織◇いろいろ。メガネ（会場、笑）。

村田◇おじいちゃんと一緒にいると楽しいですか。

伊織◇楽しい。

村田◇どういうとき？ どういう風に楽しいの？

伊織◇一緒にお散歩いこうとか、いわれたら、じゃあ行こうってなる。なんかうれしい。



村田◆そうですか。やさしい？

伊織◆うん、やさしい。

村田◆そう。やだなあ、おじいちゃん、ってことない？

伊織◆うん、ちょっとはある（民治さん・会場、笑）。

民治◆大きい声で言うて（笑）。

村田◆どういうとき？たとえば？

伊織◆一緒に遊んで、っていつでも遊んでくれないとき。

村田◆あら、そんなことあるの。そんな、遊んであげないんですか。おじいちゃん。

民治◆遊んでやりたいんですけど頭の回転がついていかないんですよ。これしたいといわれてもその気分になかなかない。身体の調子というか、気分がね。ほんで知らん顔してたら、遊んでくれへんていうんですよ。自分の気持ちと動いてないと全然遊べないんですよ。

遊んでもこの間は座って寝てたらしいです。座って寝てるのに、私が勝負に勝ったということになっているんです。（伊織くんへ）そやな（笑）。

村田◆おじいちゃん、体調の悪いときもあるから遊んでくれないときもあるのよね。

●安心して地域で暮らせるためにもう少しすすめていかなければならないこと

村田◆館石さんへお医者さんという立場としても伺います。認知症と診断されるまでに時間がかかったり、診断できるお医者さんがいないということもずいぶん問題となっていますが、お医者さんをどう養成していくかという問題もありますね。

館石◆できるだけ早期に認知症の診断が確定すれば、ご本人の判断能力が十分あるうちにご家族と一緒に先々のことを考えて、計画的に備えることができますよね。混乱などが起こらない前にしっかり準備を整えられれば、在宅で暮らしつづけることもできると思います。

周りが早く変化に気づいて診断の確定に導くことが大事ですが、そのためにはまず、かかりつけ医の先生方に、認知症という病気に関する理解を深めていただいて、「ひょっとしたら？」という段階から専門医につながって早く診断がつく。そういう流れをねらった「かかりつけ医のための認知症対応力向上研修」が、今全国で始まっていて、多くの開業医の先生方が受講してくださっていますので、早期診断の流れは確実に広がっていくと思います。ただ先ほどもいいましたが、早期に診断がついた後、医療だけで、認知症の人の長期にわたる暮らしを支えていくことはできません。一方で早期診断を出発点にする医療があつて、もう一方で生活を支えるサービスが地域にあつて、それらを囲む地域の人々の認知症に対する理解、これらがバランスよく整えられていくことが大切だと思います。

村田◆認知症をきちんと診断できる医者を養成しておられると伺いましたが、全国的にどの程度まですすんでいるのでしょうか。

館石◆正確な数字はわかりませんが、たとえば精神科の先生方の中には急性期の精神疾患を専門としている先生もおられ、精神科医のすべてが認知症のプロというわけではありません。逆に内科の先生であつてもかかりつけ医としての診療活動をつづけている中で認知症に非常に詳しい方もおられますから、傾向としては確実に増えてきているといえます。未来は決して暗くないと思います。現在の取り組みが各地で着実に広がっていくことが大事だと思います。研修の講師役などができる先生を「サポート医」と呼んでいます。この「サポート医」を養成する研修も行わ

れていて多くの先生方が受講してくださっています。恐らく 2、3 年すれば、「サポート医」がかなり増えていると期待できます。

村田◇もう数年たてば全国的にサポート医の方がいらして、いろいろな先生方を研修してくれて、どこでも、あっちいけこっちいけとか、うつ病だとか、まちがった診断をうけることがなくなると期待してよさそうですね。

●認知症の告知—早期診断から本人・家族を支えるには

村田◇お父様の診断もはっきりわかるまでだいぶ時間がかかったそうですね。

照美◇かなり長かったですね。何軒もまわってどの先生も年相応とか、若いからちがうよと、まず言うんで。専門医の先生も、若いというのが原因で認知症といわれたい。あとで今の主治医にきいたら、50 代の人に認知症と告げることがどれだけストレスかと考えたから、診断はついていんだけど言わなかったのではないかという話がありました。でも私たちは、うすうすわかっていますし、言ってくればそのときから取り組めるわけです。それがないまま、たらい回しされどんどんストレスが溜まって、最終的に今の先生にめぐりあうまでは診断がつかなかった。先生のほうも気づいてはるんやなあ（笑）。

村田◇へんな気のつかい方ですね。そういうご意見、館石さん、どううけとめられますか。

館石◇吉田さんの例が具体的にどうだったのかはわかりませんが、認知症という診断がついたときに病名を告知することについてもきちんと考えておかなければいけないと思います。欧米では告知するのが当たり前ですが、日本では告知すべきでないとお考えの先生もまだ一部におられるかもしれません。大事なことは、病名を告知して、「では、さようなら」では困ります。特に、早い段階であれば、この先認知症という病気はどのように進むのか正しい知識をお伝えし、「認知症になったからといって何も普通の生活をあきらめることはない、こういうサービスが地域に用意されているから上手に使っていけば 5 年、10 年先にもこうやってちゃんと暮らしていくことができますよ。そのためには自分がかかりつけ医としてちゃんとあなたを支えます。」と告知されていく流れができると日本でも告知が当たり前になると思いますし、実際にそうなりつつあると思っています。

村田◇昨年、この報告会に出ていただいた若年性認知症と診断された佐藤さんも、そうした支援体制がないと早期診断イコール早期絶望だとおっしゃいました。告知したお医者さんが介護保険のことすら説明してくれなかったという経験があったそうですが、こうした実態が残っていることもまた事実じゃないでしょうか。

堀田◇認知症でもその人らしく生きられると保証されれば、絶望ではなく普通の人生の過程だということになるわけですから、私たちがここでやっている運動を含め、認知症の方も普通に受け入れる仕組みができあがるのが答えになるのだと思います。

今、決定的に遅れているのは成年後見です。ご本人にとって一番いい環境をつくる、たとえばその方に適した施設の紹介とか、身のふり方、財産を守ることですが、成年後見人はまだ圧倒的に足りません。認知症の方 170 万人の中で成年後見がついている方はやっと 17 万人、それも家族の方が多いのが実態です。本当は第三者がいいのですが、これが非常に遅れているのが今、気になります。

本人の安全を守るという点では、車の事故といった事例も耳にしています。道路行政の方とし

っかり組んで、外を自由に歩いていても安全な仕組みをつくるという、ハードの面でも対応が必要ですね。ソフトの面では成年後見や、皆で理解して受け入れるということ。これはまさに皆さん方のすばらしい努力で進んできています。吉田一平さんはそれをゆっくり、とおっしゃいました。私はふれあいときずな、人と人との関係でそれをつくりあげたい。一番大事なことは本人がまだ持っておられる能力を活かしていただくことではないか、と思います。民治さんは昔の記憶で外国人に京都の名所を説明して生き活きとしておられる。認知症の方々はすばらしい能力をたくさん残しておられます。それをみんなでどう活かすのか、そこまで支えあいがすすむと、認知症になっても本当に生き活きとやっていける社会になるのじゃないかと思います。

一平◆今、堀田さんがおっしゃったように、役割と居場所づくりは、認知症の方だけでなくリタイアされた人も皆、課題になっています。今職場でも町づくりでもそうですが、みんな一所懸命なんですよ。あまりやらない人を非難したりして。もうちょっと疲れないようにやっていかないと結局、一人去り、二人去り、となります。ゆっくり、遠回りでもいいからやり続けていく。そういうことを考える時期にきているのではないかと思います。

村田◆一所懸命がいけないわけではないですよ。

一平◆人が許せない一所懸命をやめたらいいじゃないかと。さぼっている人がいると怒っちゃうでしょ。会社はどうかわかりませんが福祉や町づくりの現場は皆くたびれてますね。日本中が（笑）。だからもうちょっとゆっくりしたらいいんじゃないかと思います。

村田◆このキャンペーンも疲れちゃわないようにしないとイケませんね（笑）。



●地域やご近所に望むこと



民治◆デイサービスに2ヶ所通っていますが、職員さんとの会話が少ないですね。気いつこうてはるんか、個人情報を書きだすと遠慮してしゃべらはんのかなーと（笑）。話題もわからんようです。行ってもすることがないと、イスに座ってじっとしているか、テレビをみているか。そしたら居眠りしだしますよね。そうす

ると「起きやー」と起こされるんです。それでもやはり寝てしまいますね。しんどいというか、時間をもてあましていうか。話しかけてもらったらこっちも話せるし、またぼくの思っていることを相手がくみとってそれを話題にしてもってきてもらえるとうれしいですね。なんぼでもしゃべれるようになってくるよね。

村田◆先ほどはご近所さんの話がでていましたが、専門職もちゃんと話しかけてくれない。座ってもらっただけのサービス提供はおかしいですね。専門職に考えてもらいたいですね。

民治◆時間になったらカラオケルームで一人でへこんでます。歌いたい歌があれば歌うとか。一人の世界ですわ。楽しいんです。雑音が入らないし。ひっこみですわね。

村田◆せっかくデイサービスに通っているなら、皆とお話して歌いたいのではないですか。

民治◆いや、私は一人ですね。誘えない。歌いたくない人もいるやろし。この頃、歌える人がわかってきたんですけど、他のことしたいかもしれんし。誘いにくいですね。

堀田◇私は別の活動で、デイサービスなど居場所づくりを全国で広げています。だれが来てもいいし、折り紙とか庭の剪定とか料理とか、したいことをいろいろしてもらっています。やってる方もうれしいようです。ただ一緒にいるというだけのデイサービスのあり方は非常に残念ですね。
照美◇父は、施設に行く意味がないと思っています。行けといわれているし、行かんと邪魔になるという意識やちょっと家族と離れた時間をもつためというので通っています。自分のリハビリ的な要素、運動能力維持という意味で通っている部分は低いです。

今はもう 70 歳ですが、行き始めの 65 歳くらいの時は、周りに比べて若いし、しゃんしゃんしゃべっていたので、お年寄りの中に入るストレスがすごく大きかったですね。デイサービスの一つは精神科のデイケアでしたが、統合失調症の若者とパソコンを一緒に習ったりするのもストレスでした。同じ病気の家族も、脳の病気だから精神科じゃなくて、脳専門の科にいくとか、脳の障がい者手帳がほしいとか、本人たちのストレス源が減るような何かがほしいといえます。

私がいつも思っているのは特に早期発見、比較的軽度の場合では、介護ではないんですよ。生活なんです。生活の中で病気が発生している人が家族にいるというだけで、たとえオムツまでいったとしても、赤ちゃんにオムツをしてあげるのと同じですね。家族の中にそういう必要性がある人がいるだけなんです。家族とともに、病気とともに生きることであって、介護するわけではないと思っています。地域の皆さんにおいても介護するのを手伝ってあげなあと、介護をまわりで地域で支えてあげようという風に考えるのではなく、その家の人は病気をもってはるけれど、こндаけしゃんしゃんしゃべってはるし、こндаけできることがある。ほんなら、その範囲で自分がつきあえるところを付き合おうか、と。庭の手入れをいっしょにしましょうとか、集会場集いがあるから一緒にいって囲碁でもしましょうとか。ちょっとした声かけをすすめていただく。私は元気なようにみえますが実は腎臓が悪くて運動制限があります。だから日常の家事でも手伝ってもらえたらうれしい。でも元気な人が家にいるようにみえるのでヘルパーがいられない。制度的な問題もありますから、そういうところで近所の方がゴミだしなど、ちょっとこれ忘れてはるんかな、それとも娘さんもしんどいし、できはらんのかなと声をかけていただく、そんなことでいいんですね。コミュニケーションも広がりますし、刺激になりますし、そういうところをちょっとやってほしいなあと思います。

村田◇今日お二人からお話をきいて、一番印象に残ったのはもっと声をかけてほしいのにまわりは遠巻きにするようにして何もいってくれないというご本人からの意見でした。こうしたキャンペーンによって偏見や差別がずいぶんなくなってきたとは思いますが、まだ残っている。それを取り除くと同時に、さらにもう一歩すすめて、当たり前

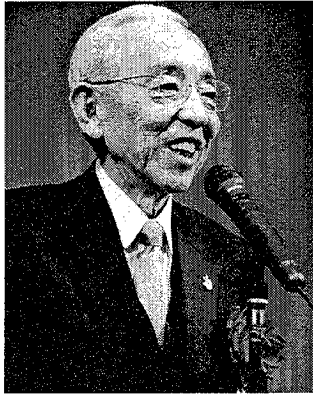


に話しかける、コミュニケーションをする、地域の方だけでなく、専門職にも必要だと思いました。デイサービスで単に置物みたいに座っているだけではサービスを受けに通っている意味がないわけで、もっと活き活きできる、自分のもっている能力をフルに生かせるようなサービスの提供が求められていることを感じました。みなさま、ありがとうございました。

Ⅱ. 第2部「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008発表会

1. 「町づくり2008モデル」の経過報告

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008実行委員長 長谷川 和夫



本日はお忙しい中、多くの方にこのキャンペーン報告会にお越しいただきましたこと、本当に感謝申し上げます。

第1部に引き続き、第2部の「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン発表会にて、2008年度の応募の中から堀田力委員長のひきいておられる地域活動推薦委員会よりご推薦いただいた、「町づくり2008モデル」の7つの活動がこれから報告されようとしています。

報告に先駆け、表彰式をさせていただきますが、これは優れた活動というよりもモデルになっていただける活動ということで、ほかの選にもれた活動もふさわしいものが多くあり、委員会では非常に白熱した議論がございました。「町づくり2008モデル」決定までの詳細の経緯は第2部冊子の44～45ページをご参照いただきたいと思います。今年度は全国から70の応募がありました。

今までの応募活動と比べても、ユニークな内容であると同時に進化していることが強く感じられました。認知症のケアが認知症のその人らしさを大事にするケア、その人を中心にするケアということを理念として掲げていますが、それがだんだんと定着してきたという感じがいたします。

もう一つ大きなことは、認知症の方、あるいは家族の方を地域で支えるというよりも、地域の中で認知症の人とともに暮らしていくには地域でどういう活動をしたらいいかという、支援するということはもちろん、その人と共に暮らすという考え方になってきているのが新しい流れではないかと思います。

「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンでは、来年度の末、2010年3月までに認知症サポーターが100万人に達するということをめざしてやってまいりましたが、堀田先生の開会挨拶でも、昨年12月現在で72万人に達したことから恐らく目標は達成されるだろうというお話がありました。初期の目的を貫徹するということは、大変すばらしいと思います。

来年度は一つの転機を迎えます。新しい意欲をもってこの町づくりキャンペーンが続いていきますように、志をもっていらっしゃる方はぜひ来年度も応募いただきたいと念願する次第です。本日はありがとうございました。

2. 全国から寄せられた地域活動一覧

(応募先着順)

No.	活動名称	応募者名称	都道府県
1	この町で普段の暮らしを続けたいな	縁側プロジェクト	愛媛県
2	地域へのかかわり方を見直そう！！職員・入居者としてではなく“地域住民”として	有限会社 プランニングフォー 認知症高齢者グループホーム「古都の家 学園前」	奈良県
3	学幸へ行こう会 幸齢者いきいき体操クラブ ～住み慣れた地域で、我が家で安心して暮らすには～	社会福祉法人 勝曼会 あすみの丘在宅介護支援センター	千葉県
4	外国籍の子と認知高齢者とのアートコミュニケーションの取り組み	多文化共生施設 DOREMI みらい	岐阜県
5	アニマルセラピー活動	NPO リトルハンド	和歌山県
6	認知症の老人と共に生きる「後世への最大遺物」ー 幼老共生社会の復権・復活を目指してー	世代間交流まちづくり「回想法」・校舎の無い学校	徳島県
7	居場所づくりー長洲カフェーの試み	誰でも安心して暮らせる地域福祉の会	千葉県
8	安心を築く力+子どもの感性=将来につながる力	うえずぎ松寿苑デイサービスセンター	京都府
9	認知症を理解してもらい、地域で生き生き生活	医療法人 千輝会 グループホーム神田イン国分	大阪府
10	顔の見える関係づくり・歩いていけるところに茶話会を	霽の会	東京都
11	認知症教育を通じた人づくり・町づくり	鹿児島純心女子大学 やさしさの網の目推進委員会	鹿児島県
12	創作劇「地域で支えよう！本当に知っていますか、認知症のこと」とシンポジウム	神戸親和女子大学 発達教育学部 福祉臨床学科	兵庫県
13	仲間と共に、若年認知症をイキイキと！	若年認知症グループ どんどん	神奈川県
14	東五のひろば	青梅市東青梅五丁目自治会	東京都
15	認知症のことを相談できる場所を知ってもらおう！！＜地域交流学習会ー在宅介護支援センターと地域住民とのネットワーク作りー＞	社会福祉法人 白寿会 玉出地域在宅サービスステーション	大阪府
16	シルバー110 番 地域認知症無料相談所	社会福祉法人 未生会 グループホーム ちくりんえん	京都府
17	先生の異業種体験から生徒の職場体験と共に育つ地域福祉活動	グループホームはるすのお家・阪南	大阪府
18	社会福祉法人がすすめるまちづくり～認知症の理解者を増やそう～	社会福祉法人 ライフ・タイム・福島	福島県
19	「地域と認知症の人」から「地域の中の認知症の人」へ向けて	社会福祉法人 ライフ・タイム・福島 ライフ吉井田小規模多機能型居宅介護事業所	福島県
20	これからの地域を支える近隣型助けあい活動	おとなりさんネットワーク「えん」	福岡県
21	公立中学校の空き教室・花壇を住民（認知症者を含む）と中学生が協働作業を通して認知症を正しく理解する	社会福祉法人 リデルライトホーム	熊本県
22	大都市における認知症介護家族の現状と求めているもの	社会福祉法人 浴風会 ケアスクール	東京都
23	認知症について考える会（だいじょうぶネット）	東住吉区東田辺地域ネットワーク委員会	大阪府

24	認知症のある人の福祉機器展示館	国立障害者リハビリテーションセンター研究所	埼玉県
25	認知症サポーター養成講座の開催推進	コープさっぽろ福祉活動交流支援センター	北海道
26	小・中学生認知症サポーターからのメッセージ	彦根市 介護福祉課	滋賀県
27	認知症に対する地域活動と妻の在宅介護(個人の講演活動)	南相馬市生涯学習アドバイザー・認知症のひとと家族の会 福島県支部相双地区所属	福島県
28	ハッピーライフのご提案 認知症にやさしいまちづくり	認知症予防推進員の会 有楽ねりま ミニ講座グループ	東京都
29	鮫川村 認知症予防に向けて村民と行政が共に助け合う仕組みづくり	鮫川村役場住民福祉課・鮫川村地域包括支援センター	福島県
30	認知症メモリーウオーク・千葉	第2回 認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会	千葉県
31	市民後見センターきょうと	NPO 法人 ユニバーサル・ケア	京都府
32	地域型認知症予防旅行プログラム5日間体験版「ボケない脳は旅で鍛える」	内閣府認証 NPO 法人 日本トラベルヘルパー協会	東京都
33	慣れ親しんだ地域で暮らし続ける～より地域に開かれたグループホームを目指して～	西脇 陽子	新潟県
34	大笹生地域の福島市立大笹生小学校4年生と当事業所利用者との世代間交流	医療法人 生愛会 附属介護老人保健施設 生愛会ナーシングケアセンター	福島県
35	認知症を理解することからはじめよう～できることから1つずつ～	みぢか ネットワーク	福岡県
36	目黒たけのこ流・認知症ネットワーキング	目黒認知症家族会 たけのこ	東京都
37	今、伝えたい認知症～区民(認知症の人も!)で支えあう町づくり～	認知症サポート連絡会(横浜市都筑区)	神奈川県
38	あさがお協力隊の活動について	旭福祉保健センター サービス課 高齢者支援担当 保健師一同	神奈川県
39	地域に根ざした多職種の人間による多角的な認知症支援	認知症のひとと共にくらす会「きくち」	熊本県
40	親父パーティーが地域を変える!～認知症地域資源ネットワーク「NICE!藤井寺」の構築～	社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会	大阪府
41	認知症 ささえあえるまちづくり事業	津山市地域包括支援センター	岡山県
42	であう・ふれあう・わかちあう 認知症の人の見守り支援「あんしんメイト」	NPO 法人 認知症サポートわかやま	和歌山県
43	地域のよさを見直し、地域を生かすケアの実践	社会福祉法人 久万高原町社会福祉協議会	愛媛県
44	認知症 予防と介護と支えあい～認知症にやさしい地域づくりを目指す～	「白い箱の会」	東京都
45	認知症を学び、知り、理解する ・認知症サポーター養成講座を周辺地域の町会を主に町内会館で開催 ・千葉メモリーウオークに参加 ・認知症の人やその家族との交流や懇親会	社会福祉法人 三育ライフ シャローム若葉(地域包括支援センター「千葉市あんしんケアセンターシャローム若葉」、グループホーム「虹の家」、認知症対応型通所介護「ひばり」)	千葉県
46	認知症高齢者 就労支援デイの試み	社会福祉法人 創隣会 グループホーム きずな	東京都
47	若年認知症支援の会「愛都の会」の活動	若年認知症支援の会「愛都の会」	大阪府
48	認知症にならないための活動	藤松まちづくり協議会	福岡県
49	回想法の取り組み	関西医大滝井病院認知症疾患医療センター	大阪府

50	子供は、みんなで守っていかないといけないんだ。～安全パトロール。継続は力なり～	NPO 法人 たんぽぽの会 グループホーム やすらぎのさと	大阪府
51	あそびながらリハビリテーション～身体機能・認知機能の活性化を図る～	社会福祉法人 芦北町社会福祉協議会 予防推進課「あそび Re(り)パーク」	熊本県
52	地域住民とともに行う認知症予防活動の実践	社会福祉法人 ふらて福祉会	福岡県
53	学習の継続と3本柱	認知症サポーターの会“かなざわささえ隊”	神奈川県
54	認知症高齢者に対する在宅支援事業	NPO 法人 福島県シルバーサービス振興会	福島県
55	認知症の方々から学ぶ暮らし方・生き方探し事業	特定非営利活動法人 ゆうらいふ	滋賀県
56	地域の声で始まった『認知症劇』	長岡市地域包括支援センター	新潟県
57	「いつでも いつまでも きれいでいたい」ヘアメイク、ハンドマッサージ等の体験により笑顔全開、気分リフレッシュ	NPO 法人 日本理美容福祉協会 滋賀米原センター	滋賀県
58	「朱雀の会 若年認知症家族会」の活動	朱雀の会 若年認知症家族会	奈良県
59	認知症支援ネットワーク構築事業	社会福祉法人 上士幌町社会福祉協議会	北海道
60	山形市介護相談員派遣事業	山形市介護相談員(山形県山形市健康福祉部介護福祉課)	山形県
61	ふれあい・いきいき・サロンと認知症をもつ人を支える仕組みづくり	近畿大学豊岡短期大学通信教育部 社会福祉士養成課程	兵庫県
62	いくつになっても“イキイキ”と「安心・快適・満足」の美容サロンが地域のセーフティネットにー	東京都美容生活衛生同業組合	東京都
63	認知症地域支援体制構築等推進事業「地域資源マップ」の作成	東郷町地域包括支援センター	愛知県
64	「共生ステーションめいまい」の活動	共生ステーションめいまい	兵庫県
65	若年認知症の方を支える講演会活動～一人の方の思いを形にすることで広がった地域作りの事例～	認知症の方の暮らしを考える会	兵庫県
66	めざせ 徘徊フリーゾーンー人間関係が希薄な都会で認知症を支えるー	医療法人社団つくしんぼ会	東京都
67	～build a bridge～心につなぐ橋渡し	玉本 あゆみ	大阪府
68	地域と共に歩む老人ホームを目指して	社会福祉法人 ゆうなの会 特別養護老人ホーム大名	沖縄県
69	小地域の公共施設を利用した「高齢者の出前居場所作り」事業	特定非営利活動法人 ふれあい坂下	茨城県
70	思い出ミュージアムで“なじみ”の場づくり～総泉病院 思い出療法	総泉病院 ウェルエイジングセンター	千葉県

3.「町づくり2008モデル」表彰

表彰：「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008実行委員長 長谷川 和夫

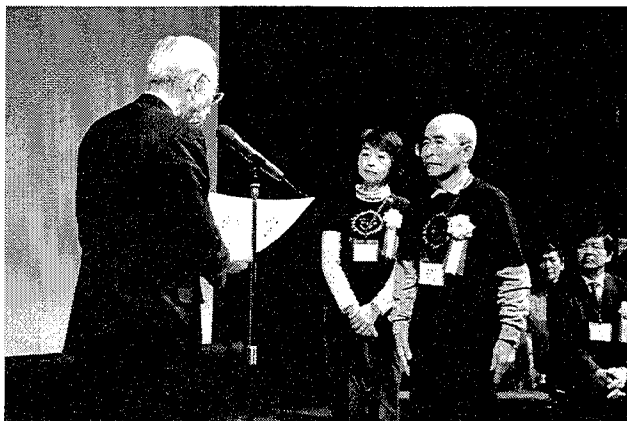
受賞：

「仲間と共に、若年認知症をイキイキと！」

若年認知症グループ どんどん

(神奈川県川崎市)

副代表 井上 富男



受賞：

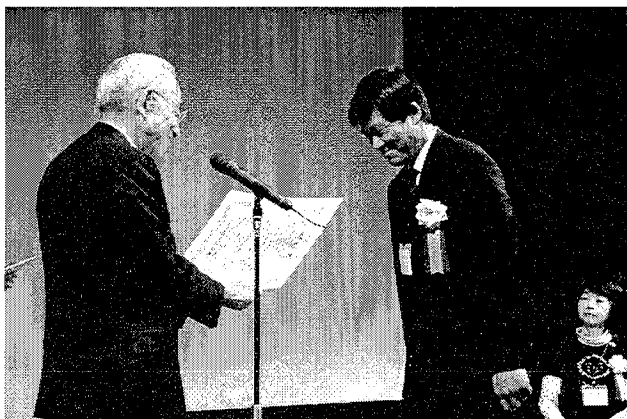
「公立中学校の空き教室・花壇を住民

(認知症者を含む)と中学生が協働作業を
通して認知症を正しく理解する」

社会福祉法人 リデルライトホーム

(熊本県熊本市)

総合施設長 小仲 邦生



受賞：

「認知症メモリーウオーク・千葉」

第2回 認知症メモリーウオーク・

千葉実行委員会

(千葉県)

委員長 助川 未枝保



受賞：

「目黒たけのこ流・認知症ネットワーキング」

目黒認知症家族会 たけのこ

(東京都目黒区)

世話人代表 青木 篤三



受賞：

「親父パーティーが地域を変える！

～認知症地域資源ネットワーク

『NICE!藤井寺』の構築～」

社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会

(大阪府藤井寺市)

事務局長 中野 和親



受賞：

「であう・ふれあう・わかちあう

認知症の人の見守り支援『あんしんメイト』」

NPO法人 認知症サポートわかやま

(和歌山県和歌山市)

理事長 林 千恵子



受賞：

「地域と共に歩む老人ホームを目指して」

社会福祉法人 ゆうなの会 特別養護老人ホーム大名 (沖縄県那覇市)

受賞者 金城 満

◇都合により、当日は欠席されました

4.「町づくり2008モデル」7団体による発表

◇各発表者には、活動発表の終わりにインタビューにお応えいただきました。

<インタビュー>

町永 俊雄（まちなが としお）

NHKキャスター。「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2008 地域活動推薦委員。

東京都生まれ。1971 年 NHK 入局。

青森、岡山などの赴任地を経て、「おはようジャーナル」「くらしのジャーナル」キャスターとして、家庭、教育、健康、福祉といった生活にかかわる幅広いテーマを担当する。

その後、「ETV 特集」「金曜アクセスライン」キャスター、

現在は「ETVワイド」「福祉ネットワーク」などの番組でキャスターとして活躍。

1 「仲間と共に、若年認知症をイキイキと！」

若年認知症グループ どんどん

(神奈川県川崎市)

発表者 代表 中川 和子



若年認知症の大事なキーワードは「一歩外に出て」「皆と遊んで」。
50代、60代のおじさん、お婆さん、だれが本人なのか、家族なのか、活動のサポーターなのか分からない中で、ごちゃまぜで活動しているのが、どんどんの特徴です。

インタビューから.....

町永 ◇「どんどん」という名前はなぜついたのでしょうか。

中川 ◇病気を告知されて落ち込む家族、本人が多いのですが、うちに閉じこもらず、どんどん町に出て、どんどん仲間をつくり、どんどん病気のことを知ってもらおうという前向きの気持ちを表現した名前です。

町永 ◇家族会はとても大事ですね。

中川 ◇経験したことを伝えてくれますし、気持ちをわかちあえますし、高齢者ではない悩み、口に出したいけれど受け入れてもらえない気持ち、いってもわかってもらえないところで、家族会のつながりはとても大事です。

＜副代表の井上夫妻が登場＞

町永 ◇どんどんでは遊ぶ、飲むというのがありますけれど、それだけ大変だからでしょうね。

井上(妻) ◇そうですね。もやもやしたものがいつもあって、それが月1回のみなさんの集まりで癒されています。今日明日あさってと、またやっという力をいつももらっています。自分がパニックに陥ってだれに話していいかわからないときに、当事者同士、家族同士の話が一番助かりました。



町永 ◇井上富雄さんもいろいろな活動をされていますが、料理が得意そうですね。

井上(夫) ◇ぎょうざをつくります。おいしいです。

町永 ◇このTシャツは、富雄さんの笑顔といっしょですね。富雄さんは副代表そうですね。

中川 ◇はい、いろいろな啓発活動に参加してもらっています。ご意見もいただいています。富雄さん、どこにいらしても、にこにこされているのでみなさんが癒されています。

○「町づくり2008モデル」推薦理由○

- ・ 若年であればあるほど「働きたい」という気持ちが強いことをしっかりと受けとめ、創作活動から生まれたものを商品化している。自主制作のTシャツやせっけんの地域イベント等での販売を通じて、社会参加意識の醸成がなされ、確実に輪が広がっている。
- ・ 若年性認知症ならではの課題に対する本人、家族などの当事者主体の活動をサポーターが支えており、若年性認知症の人たちがいきいきと暮らすための指針になる活動である。
- ・ 何もないところから創意工夫でつくりあげていく力はすばらしく、本人を真ん中に据えた先駆的な取り組みであり、認知症介護の隙間となっている若年性認知症の人への取り組みモデルとして広がってほしい。

若年認知症グループ とんとん

遊んで飲みます！
おじさん・おばさん
2006.07～2009.01



2006.7.25 発足

- 川崎市認知症ネットワーク(市内各区の家族会とボランティア団体の連絡会)の自主活動として、この日スタートしました。
- 月に1回、第4火曜日が活動日。
決まった活動場所はなく、
あるときは体育館、あるときはビール工場、
いろいろなところで遊びます。
- 川崎市の人だけでなく、東京など周辺地域からの参加もあります。

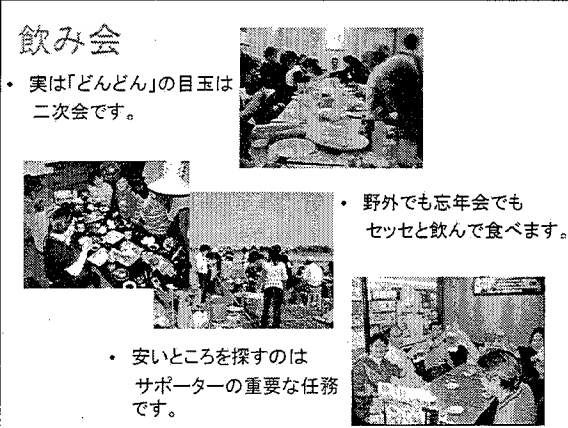
活動風景

- 若いのでスポーツが人気です。
- 慣れないこともいろいろやります。
- 毎回家族ミーティングがあります。
- 本人のミーティングは始めたばかりです。



飲み会

- 実は「とんとん」の目玉は二次会です。
- 野外でも忘年会でもセツセと飲んで食べます。
- 安いところを探すのはサポーターの重要な任務です。



旅行

- ときどきバスハイクに行きます。
- Tシャツを売って「豪華温泉一泊旅行」を実現しました。



Don't Worry Tシャツ

- 600枚以上も買っていたきました。今も販売しております。



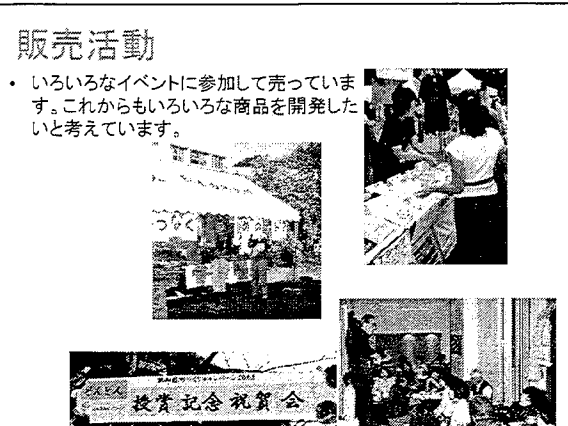
ハガキと一筆箋

- 絵手紙教室での作品をハガキと一筆箋にして売っています。



販売活動

- いろいろなイベントに参加して売っています。これからいろいろな商品を開発したいと考えています。



2 「公立中学校の空き教室・花壇を住民（認知症者を含む）と中学生が協働作業を通して認知症を正しく理解する」

社会福祉法人 リデルライトホーム

（熊本県熊本市）

発表者 総合施設長 小仲 邦生



きっかけは子どもたちの数が減り、学校の教室や花壇が管理されないまま放置されているという現状でした。豊かな人間の関係が人を育てます。地域住民が自由に出入りすることで子どもたちの安全も守りたい、地域の縁側になってほしいという中学校側の思いに共感し、取り組んでいます。

インタビューから.....

町永◇中学生とともに考えよう、と若いターゲットに絞ったのは、どういう思いがあったのでしょうか。

小仲◇未来を担う人に正しく認知症のことを理解してもらいたいという思いです。中学生のお父さんお母さんは40、50歳代が多く、そのおじいさんおばあさんが認知症になる世代です。種をまくことが大事だと思います。

町永◇運動会に認知症の高齢者を招いてもらったそうですが、どういう感じでしたか。

小仲◇楽しかったですね。私も出たかったのですが、声がかからず（笑）外でみていたのですが、来年度つまり、今年の秋からは定例的にプログラムに入れてくださるそうです。とても感謝しています。



町永◇中学生は準備もとても一所懸命ですね。

小仲◇前日や2日前から施設にきて、「私があなたとペアを組む〇〇です」と自己紹介してくれます。

町永◇まさに「認知症を理解する」ではなく、「その人を理解する」という活動ですね。

小仲◇そうだと思います。

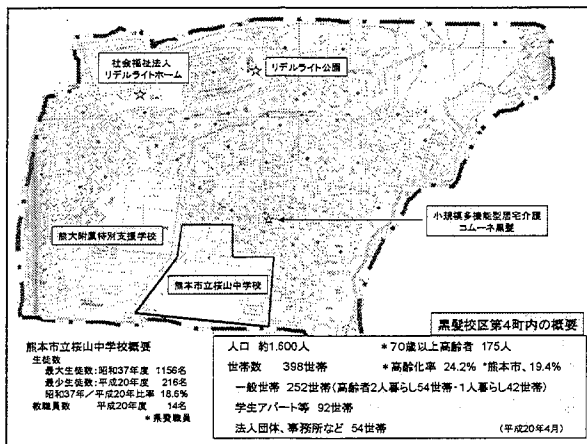
○「町づくり2008モデル」推薦理由○

- ・ 事業実施委員会において、行政・PTA・民生委員・自治会・中学校長など、地域に携わる多くの住民が参加し、地域に根ざした活動が行われている。
- ・ 地域の人たちの意識を変えていくために、まず実態を把握し、進むべき道筋を示していく取り組み方が素晴らしい。こうした地道な取り組みや方法が地域を変えていく力となり、今後の積み重ねに期待できる。
- ・ 学校行事などに認知症の人が参加することで、中学生だけでなく、その保護者や教職員に対しての啓発効果・理解の普及にもつながっている活動であり、他の地域でもぜひ参考にしてほしい。

[発表資料]

公立中学校の空き教室・花壇を住民と中学生が
協働作業を通して認知症を正しく理解する

社会福祉法人リデルライトホーム
総合施設長 小仲邦生



「豊かな人間の関係が人を育てる」そんな町内にしたい



「読者の理解について」アンケート実施 左:全中学生・教職員(242名) 右:住民(64世帯)



住民学習会で「認知症とは」専門医から学ぶ(53名)

認知症高齢者と一緒に空き花壇に野菜を植える



“高齢者”を体験してみることが理解の第一歩(体験と座学)



大学准教授による
出前講座

文化発表会セミナー

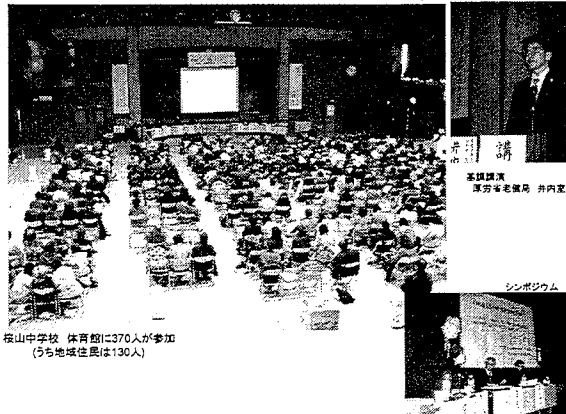
“認知症の人”ではなく“その人”を正しく理解することの学びが関り方を変える



中学校保護者対象の講座(15名)
中学校図書室で夜間実施

住民対象の講座(56名) 中学校武道場で夜間寒座

「認知症になってもだいじょうぶ そんなまちづくり」シンポジウム(09.1.24)



按山中学校 体育館に370人が参加
(うち地域住民は130人)

「活動の具体的な取り組み」概念図

黒髪校區第4町内各団体・組織連絡協議会

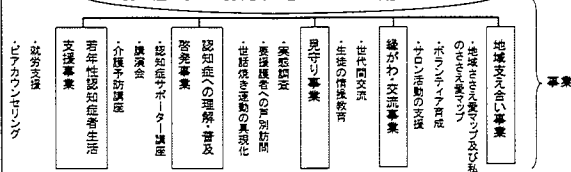
協働会組織　・民生委員・老人会・婦人会・シルバーヘルパー・老人クラブ・グランドゴルフクラブ・自主防犯クラブ・文化連室委員会・下立田共有地委員会・菅原神社税代

オブザーバー　・リデライトホーム・黒髪小学校・桜山中学校・熊本大学附属特別支援学校

その他　認知症を抱える家庭・包括支援センター・地域密着型サービス事業所・ボランティア・校区社協・PTA保護者・校区公民会・校区保護婦

その他 認知症を抱える家族・包括支援センター・地域密着型サービス事業所・ボランティア・校区社協
PTA保護者・校区社協・校区保健師

認知症になっても安心して暮らせる町「黒髪」づくり部会



3 「認知症メモリーウオーク・千葉」

第2回 認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会 (千葉県)

発表者 委員長 助川 未枝保



1994年に制定された世界アルツハイマーデー(9月21日)に諸外国で行われているメモリーウオーク(パレード)という「皆で共有しようという活動」を千葉で行おうともしあがり、民間、行政、さまざまな方がそれぞれの立場で意見を出し合えるよう実行委員会形式で立ち上げました。老若男女、さまざまな立場の人がタテとヨコからつながって、住みやすい町をつくっていきたいです。

インタビューから.....

町永 ◆メモリーウオークを始める前は手探り状態だったそうですが、どんな不安がありましたか。

助川 ◆1つは、みんながメモリーウオークを理解して集まってくれるかということを心配しました。2つめは、警察からいわれましたが、パレード形式はとても高いリスクがありました。参加者 520 名のうち 150 名がボランティアスタッフでしたが横断歩道全部に2人ずつ立ち、お年寄りにも危なくないよう誘導してくださり、とてもありがたかったです。

町永 ◆お年寄りも多かったということは、認知症の方や家族もいらっしゃったのでしょうか。メモリーウオークをやってみての手ごたえ、反応はいかがでしたか。

助川 ◆出発式のセレモニーのときに、本人の方がいらして下さって、その方は英語、中国語、日本語など4ヶ国語を話すんですよ。本人が出発式のときに歩きましょうとおっしゃって下さって、そこでまた心が一つになって歩き出しました。みなさん、それぞれ役割も担っていただきました。



町永 ◆メモリーウオークは今年、3回目の実施になりますね。今後はどのように広げていけますか。

助川 ◆地域の中から開催したいという声をいただき、どんどんバトンタッチして広がってくれればいいなと思います。

町永 ◆タテにもヨコにも広がってくれればいいですね。

○「町づくり2008モデル」推薦理由○

- ・ パレードという短発的な活動のようではあるが、実行委員会方式により準備から当日まで様々な立場の人が協力しあい、その過程のつながりが当日のパレードに結実している。
- ・ 今年は2回目の取り組みであり、県下に着実に広がりを見せ、海外への広がりも見られる。認知症の人をより良く理解してもらうためのPR効果も高く、成果が上がっている。他の地域への波及可能性も高い。
- ・ 認知症の人の参加にも力点が置かれており、当日は車イスの人も含む多くの人が共に参加し、当日参加できない人もメッセージをかけた「うちわで参加」するなど、本人が主役となる配慮・工夫が見られる。広域型・地域型に分けての開催で地域に応じた展開がされており、今後の発展が期待できる。

認知症メモリーウオーク・千葉



第2回認知症メモリーウオーク・千葉実行委員会

日本初！認知症メモリーウオーク・千葉

1994年の国際アルツハイマー病協会国際会議
で9月21日を「世界アルツハイマーデー」と宣言

↓
諸外国ではこの日を中心にこの病気に対する街頭
啓発活動として「メモリーウオーク」を盛んに開催
しかし、日本ではおこなわれていない

↓
千葉から日本初として「認知症メモリーウオーク・
千葉」を実施

実行委員会方式

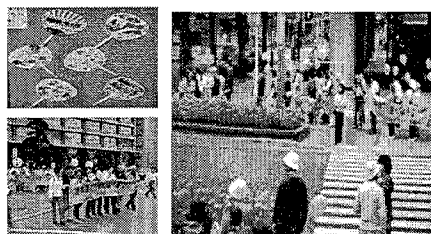
民間と行政とが力を合わせて実行委員会を設立

↓
様々な職種の人たちによる、様々な意見を融合

↓
平成19年9月16日(日)

日本初！「認知症メモリーウオーク・千葉」開催！

第2回認知症メモリーウオーク・千葉



○ 集合：千葉県千葉市中央区(千葉県庁前)

○ 日時：平成20年10月13日(月・祝) 10:00～

認知症メモリーウオーク・千葉in香取



○ 集合：千葉県香取市佐原(佐原文化会館)

○ 日時：平成20年10月19日(日) 10:00～

認知症メモリーウオーク・千葉in佐倉



○ 集合：千葉県佐倉市ユーカリが丘(よろこび広場)

○ 日時：平成20年11月29日(土) 12:45～

広げよう！認知症メモリーウオーク・千葉

- 認知症の人、家族、介護従事者、行政などの横のつながり
- 子供から大人までの年齢層の縦のつながり



「認知症になっても住みやすい千葉を」の
イメージが、縦横の織りとなって広がっていく

4 「目黒だけのこ流・認知症ネットワーキング」

目黒認知症家族会 たけのこ
(東京都目黒区)

発表者 世話人 竹内 弘道



たけのこには 50 代から 90 代の方が参加しています。家族会の集いではミニデイを併設し、みなさん「ゆるやかなミニ家族」になってきています。

他の区と交流してみても、自分たちの良いところがありました。その一方で若年性認知症の家族会とも知り合い、有益な情報をもらいました。外部とのネットワーク、人脈を活かし、保健師の地域力をつかってイベントも開催しています。

インタビューから.....

町永◇自分の言葉で等身大の感覚で語っていただきましたが、家族会というニーズに一番近いところからの活動という強みがあるのでしょうか。

竹内◇そう思います。みんなそれぞれ、いろいろな認知症の人をみえていますから、自分のことだけでもいろいろなことがみえてきます。等身大というか、そこから出発しないと何もみえてこないと思います。

町永◇家族、社協、保健師さんのコラボレーションで活動されているとのことでした。他の地域でもできるのではないかと思います。なぜ他のところでなかなかできないのか。何が必要でしょうか。

竹内◇たぶん、たけのこができたときに区にはとても有能な保健師がいて、こうしたことを仕組んでくれたと思います。ぼくたちも最初、そのメリットに気がつきませんでした。活動しているうちに、こうした協力はとんでもないことだと思



うようになり、むしろそれに肉づけしていったというのが、今のぼくたちです。どう仕組んだというかは、本人にきいてもらったほうがよいでしょうね。

(客席の保健師をさす)

町永◇やはり保健師さんの活動があったからでしょうね。(会場で保健師さんが同意。会場、笑)

町永◇ああいう風に率直にいえるところがいいですね(笑)

○「町づくり2008モデル」推薦理由○

- ・ 家族が力を発揮しながら、本人・専門職(医療・保健・福祉)・地域住民に見事にネットワークの輪を広げてきた好例である。活動も日常的なものとイベントとを多彩に組み合わせており、家族会ならではの取り組みである。
- ・ 地道な活動が実を結んでいる。ネットワークづくりが多くの地域で課題となっている今、ネットワーク形成のプロセスは他の地域でも参考にできる。
- ・ 家族会の社会化として捉えることもでき、家族会が区の保健師に支えられながら自らの体験を語り、回を重ねることで一回り大きなグループへととなっている。全国にある家族会が今後各地で広がっていくための1つのモデルである。

目黒たけのこ流 認知症ネットワーク



目黒認知症家族
たけのこ

たけのこの例会

ミニデイサービス

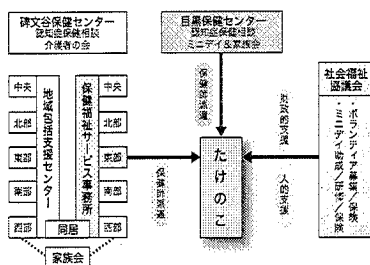


家族交流会・学習会



ミニデイ付き家族会
・第1・第3金曜日
午前9時半～12時
・中目黒スクエア集会所

たけのこ目黒区の認知症支援態勢



目黒区 人口25万人、高齢化率18.4パーセント
介護認定者8,056人 介護サービス利用者6,688人

認知症啓発イベント[たけのこ広場]

ミニフォーラム



交流会



音楽会

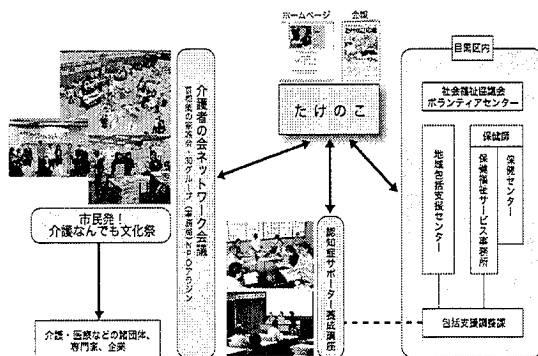


体験ミニデイ



イベント[たけのこ広場]
・年1回 日曜日1時～5時
・区総合庁舎大会議室ほか
(内訳)
「医師+保健師による個別相談」
「ミニフォーラム」「交流会」
「体験ミニデイ」「音楽会」

たけのこのネットワーク



**5 「親父パーティーが地域を変える！
～認知症地域資源ネットワーク『NICE!藤井寺』の構築～」**

社会福祉法人 藤井寺市社会福祉協議会
(大阪府藤井寺市)

発表者 総務地域福祉係 家田 葵
地域包括支援センター 羽根 武志



認知症をキーワードにした地域づくりのカギをにぎるのは、団塊世代の「親父さんたち」だと感じました。

長年、社会で培ってきた親父パワーが地域社会にはこれから絶対必要です。私たちの活動は認知症に特化していないから、参加いただきやすいです。

インタビューから.....

町永 ◇ 認知症の活動のすそ野が広がっていますね。「親父さん」というのは君たちからみてどんな世代ですか。

羽根 ◇ 頼りがいがある、いろいろアイデアも出してくれますし、かわいがってもらいました。とてもいい世代です。

家田 ◇ やりたいという思いがちゃんと形になる方法をよくわかっているの、私たちがこんな風に困っているといったら、じゃあこうしようと皆が意見をくれます。

町永 ◇ 認知症に特化しないから参加しやすいとありましたが、認知症の人や家族との関わりはどうですか。

羽根 ◇ 認知症の人は特別な人ではない。それで「なってもええやん」という声がでてきました。特別じゃない、まだ普通に話できるやん、いっしょに歌うたえるやん、笑えるやん、と特化しないところが必要だと思っています。も



ちろん本人や家族へは「こういう意図でやります」とちゃんと説明し、賛同してもらって参加してもらっています。

町永 ◇ 地域の力が底上げされて、地域の人材力が高まれば、お父さんが認知症になってもだいじょうぶというだけでなく、たとえば子育ての問題とか、いろいろな問題にもその力は広がりますよね。

家田 ◇ そういってもらえたらうれしいですね(笑)。

○ 「町づくり2008モデル」推薦理由 ○

- ・ 日帰りアウトドアや公園イベントでは、様々な関係者が関わることで、認知症の人の理解を深める良いきっかけとなっている。団塊の世代の生きがいがづくりと、ボランティアなどの人材発掘という成果も得られている。音楽を通じての啓発活動を行っている点も親しみやすく、発想がユニークである。
- ・ 認知症に特化した目線を強調しすぎず、自然に多くの人をまきこみ、参加者も楽しむことができる。
- ・ 親父の潜在力に着目したところが良く、地域文化をもふりいたさせる試みでもある。
- ・ 今後、団塊の世代が高齢者になっていく中で認知症の人も増えていくが、まさに団塊の世代である「親父」自身が認知症の理解を深めそれらを自分たちで広げていくことは、他の地域でもぜひ広がってほしい取り組みである。

(大阪府) 藤井寺市社会福祉協議会

おやじ 親父パーティ

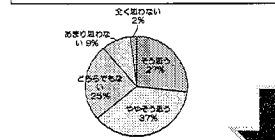


親父のチカラで地域を変える!

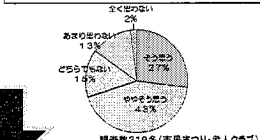
～認知症地域資源ネットワーク「NICE! 藤井寺」の構築～

アンケートからヒントを探った

Q1 身近に認知症の人がいたら、お世話をしてあげたい。



Q2 認知症の人に、どのように接したらよいかわからない。



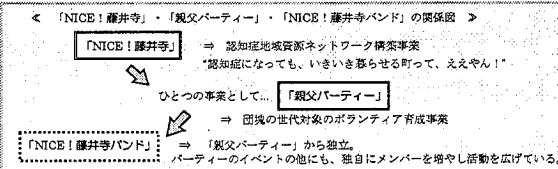
調査数319名(市民まつり・老人クラブ)

ビジョンの設定

- ・認知症の方とその家族を地域で支えるサポート体制づくり
- ・認知症をキーワードにした地域づくり

今後、高齢化が一層進む中で認知症は増加すると考えられる。まさに国難の世代である「親父」自身が認知症への理解を深め広げたい(ことに意味がある!)

“NICE! 藤井寺バンド”の誕生☆



↑「いきいき歌体操」とコラボ



↑尺八の音色があるのも自慢

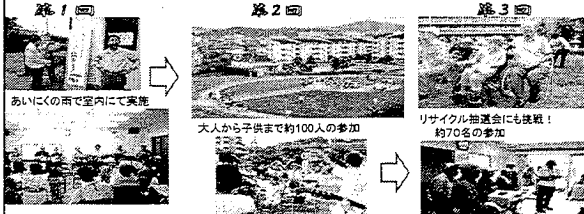


↑女性メンバーも増加中

「公園を親父が変える!」イベント♪

地区の公園を使い地域の人が集まるイベントを企画。住民が自然に集まり、大人が楽しく過ごす公園になれば、子どもや認知症のかたがたも自然に外で楽しく過ごせるのではないかと音楽と簡単なレクリエーションを中心としたイベントを実施。

知名度がUP! ファンレターまでもらった♪



青空の下、音楽があれば人が集まってくる! 認知症に関心がなくても、来てくれたら啓発宣伝できる!

藤井寺市ってどんな町?

人口: 66,704人 高齢者人口: 14,241人 高齢化率: 21.3% (H28年9月末)

- ・大阪府で1番面積が小さい市
- ・古墳が多くあり歴史のある町
- ・近鉄パッセ本拠地があった...



始まりは『NICE! 藤井寺』

- 認知症サポーター115人キャラバン
- 徘徊対応模擬訓練
- シンボルマーク作成
- 徘徊SOSシステム
- 広報・啓発(ニュースレター・II)
- 専門職サポート研修
- 地域資源情報集の作成
- 認知症フォーラム
- 介護者家族セミナー(介護家族の会)
- 住民意識調査
- (認知症理解促進キャンペーン)

(N) 認知症になっても (I) いきいき暮らせる (C) 町(CITY)って (E) ええやん!

『親父パーティ』を開催☆

隠れている『親父パワー』を見つけたい!

マンションなどに歩いてチラシ配布

何かしたい! という人が集まった♪

じゃあ、せっかくだし何かしようや~☆



(石田教授のワークショップは、参加者の持つ価値観を変えた!)

親父パワーとは...

長年社会で培ってきた知識・経験・技など
様々なパワー

↑(NICE! 藤井寺バンド立ち上げのきっかけになった「ギターおじさん」)

認知症高齢者日帰りアウトドアイベント!

第1回イベント【20.3.23】

「とにかく始めよう!」挑戦! 専門職のボランティア参加は大きい
皆が初めてだから逆に安心
当日のたくさんの笑顔にヤル気が出た
「もう一回やるで!」ヤル気が出た!

(半年の準備期間をメンバーが提案、その間は修行の期間に!)

第2回イベント【20.11.15】

企画力を発揮! 日程や時間帯、場所も自分達で決定
遊びメニューが充実! レクグッズも手作りによる
なるべく省エネで自分達が出来たことをやる! 地域の老人クラブや地区の協力もあり大成功★
テーマは、「まず自分達が楽しむ」

『親父パーティ』の効果

親父パーティの成功ポイント

- ①「日帰りアウトドア」や「公園イベント」で、様々な立場の人が関わることにより、自然に認知症の理解を深めるきっかけとなっている。
- ②『親父パーティ』と名前をつけることで、男性の参加が得られている。また今までボランティア等に参加していなかった人まで取り込めている。(女性メンバーの意見として、女性はどうも名前でも来ない人は来る! とのこと)
- ③リーダーがいなくても上下関係もなく、それぞれが得意なことや気負いを出発しており無理していないから、次につながっている。
- ④イベント自体の予算がゼロ。おやつ代等の割合が少ければ、家庭でもボランティアも必要が少なくなる! だから継続できるし意見もよく出る! 参加費も自分達で決めるので!
- ⑤認知症に特化していないから、自然に多くの人を巻き込める。ボランティアの人材も自然に開拓の世代のいきいきの町の意味も持つようになった!

こんなことも出来るかも?!

- ※ 認知症キャンプ(宿泊)
- ※ 高齢者の運動会
- ※ 何でもやり隊(ボランティア団体)
- ※ 歌声喫茶
- ※ 秘伝の漬物講座
- ※ 「親父」の人生相談所(若者向け)
- ※ 高齢者が、秘伝の味を伝授

6 「であう・ふれあう・わかちあう 認知症の人の見守り支援『あんしんメイト』」

NPO法人 認知症サポートわかやま
(和歌山県和歌山市)

発表者 理事長 林 千恵子



私たちは家族会から生まれたNPOです。つどいの中で本人や家族から相談していただいたこと、寄せられた声から誕生しました。ネーミングもお世話するというのではなく、対等な友人として互いに良い時間を共有するという思いがあります。

家族は急ぐこともありますが、あんしんメイトはゆっくり、ゆったり関わることができます。認知症の方は人とのコミュニケーションが少ない方もいますので、その助けとなれればと思います。

インタビューから.....

町永 ◆ あんしんメイトは家族支援の活動ですね。逆にいうと家族支援というのはまだ足りないのでしょうか。

林 ◆ 電話相談はしてくださるのですが、つどいなどは敷居が高いと感じる方もおられます。外へ出て来られない方へはこちらから伺いニーズをきかせてもらうことを始めたらとてもいい結果がでています。続けていきたいと思っています。

町永 ◆ あんしんメイトは介護体験のある人ですか。

林 ◆ 一応介護体験のある人としていますが、特に必要ないかもしれない私は思っています。ただ、介護体験のある人のほうがご家族は安心されることもあります。あんしんメイトには今まで経験をしたことを活かして活動いただいています。



町永 ◆ あんしんメイトは、これからますます必要になってくると思いますが、十分足りていますか。

林 ◆ 利用する人が増えてきています。財源の関係もありますし、今の状態では大変だという声もあがっています。

町永 ◆ あんしんメイトの活動が広がっていけば、地域づくりとしての広がりもありますよね。

林 ◆ そうですね。

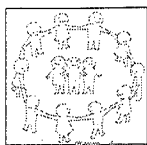
○「町づくり2008モデル」推薦理由○

- ・ 認知症の人を支えるには介護保険のサービスだけではなく、「あんしんメイト」は認知症の理解から具体的支援に結びつける取り組みとして本人・家族を直接的に支える大切な活動を展開している。相談活動を大切に、当事者のニーズに基づいた「見守り支援」のシステム化が図られている点がすばらしい。
- ・ 家族の会の活動の延長として、本人や家族の不安、負担の解消軽減に何が必要であり、どうしたら実践できるのかに対して、一つひとつを見事に活動につなげている。
- ・ 認知症本人を対等にみる起点も大切であり、「あんしんメイト」の活動は地域福祉全体を底上げしていく可能性を持っている。行政の関わり方の観点からも、市民・ボランティア・NPOと協働するあり方は参考となる。介護経験者のつながりや活躍の場になっている点も他の地域に広まってほしい。

出会う・ふれ合う・分かち合う

認知症の人の見守り支援

あんしんメイト



介護家族の経験から
誰もが安心して暮らせる社会に

NPO法人 認知症サポートわかやま



認知症サポートわかやま 相談支援活動内容

1. わかやま認知症なんでも電話相談
2. 相談交流会 つどい
3. 認知症の人と家族の思いを話す ピア・カウンセリング
4. であう・ふれあう・わかちあう認知症の人の見守り支援 あんしんメイト
5. みんなで一緒に楽しもう! ほっとルーム
6. 認知症支援者のためのグループワーク
7. 認知症サポーター養成講座
8. 講演会・認知症疑似体験等

介護家族向けパンフレット



あんしんメイト誕生の経緯

◇家族の声

「ずっと一緒に疲れる」「急な用事の時見守って欲しい」



◇平成18年

介護保険地域支援事業の中の家族支援事業として和歌山市と協働して行う

◇家族介護を終えた人、仕事をリタイアした人達の生きがいの場として

あんしんメイトの理念

◇地域で共に生きる人間としての視点

◇お世話する・されるではなく 対等の関係の友人として

活動の指針

◇家族と本人の総合的な支援

◇メイトの社会参加と生きがいづくり

◇関係機関と連携して活動の成果を広げていく

あんしんメイト活動内容

◇目的 認知症高齢者と家族の精神的負担 不安の解消・軽減

◇利用者 65歳以上の認知症高齢者

◇申請者 和歌山市在住の家族

◇利用場所 自宅又は支援ルーム

◇利用料 週3時間まで無料

◇利用方法 地域包括支援センターへ申し込み、市役所(高齢者福祉課)にて決定されたら、その後利用したいときに直接、認知症サポート和歌山に連絡する。

※認知症の本人が若年の場合や一人暮らしの場合等についてもケースバイケースで検討して対応する



あんしんメイト養成講座

◇介護経験者を対象に2日間の講習を行う

◇学習内容

医療、ケア、制度、専門機関、権利擁護
個人情報保護、体験発表等



定例勉強会

◇毎月17日に開催

◇ミーティング、
内外講師による勉強会



認知症サポートわかやまサロン

◇ビデオ・DVDの活用 ◇書籍の貸出

あんしんメイト利用家族の声

◇家族とは違った会話を楽しんでいる様子

◇明るい方が来られ歌を歌ってくれるので、ひとりでも歌うようになった

◇妄想がなくなってきた

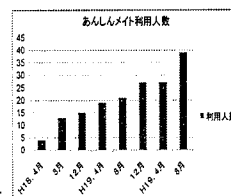
◇たまにお会いしたときは励まされ、今の状態を肯定的に捉えて下さるので明るい気持ちになれる

◇家族の自由な時間が与えられ感謝

今後の展望

◇家族対象の訪問カウンセリング等への支援を行う

◇県内各地で、家族の相談交流の場としての「つどい」を開催し、連携して見守り支援の輪を広げていく



Ⅲ. 本日のまとめ

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議議長
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008地域活動推薦委員長
堀田 力



宮島局長をはじめ、これだけ多くの皆様が長い時間にわたってじっくりと聴いて頂きました。本当にありがとうございました。

すばらしいメッセージをまとめて頂いた事務局の皆様、大変なご苦勞があったと思います。本当にありがとうございます。それにすばらしい話を引き出し、深めて下さいましたプロ中のプロであります村田幸子様、町永俊雄様、ありがとうございました。

この運動が始まりまして4年、脈々と大きなうねりが起こっているのを実感して頂いたと思います。そのうねりは、だれが作りだしたものでもなくて、それぞれの地域の草の根からいろんな形でわきあがり、一つの方にまとまりつつある。これがすばらしいと思います。そういう自然な動きの中で、期せずして一つの胎動があらわれつつある。長谷川和夫先生がご指摘されましたように、認知症の方というのはお世話をする対象ということではなく、その人である。対等な仲間であると認識してつき合っていこうという、そういう自覚が生まれ、また、本人からもそうしてほしいというメッセージが出てきている。運動がたしかな方向に向かっていることを実感いたします。多くの認知症の方々が本当にその人らしく尊厳をもって暮らすことができるようになっている、それが本当にすばらしいことだと思います。

ただ、まだまだ私たちの手が及ばず、家族にすら理解されず、非常な不安と孤独の中で時間をすごしておられる認知症の方々の数が多い。そしてこれからも認知症の方はどんどん増えていきます。この運動のうねりは一つ大きな山になってきておりますが、まだまだこれから、もう一つ、もう二つ、大きなうねりにして、全ての人をその人らしく支え、その人らしくつきあい、それによってその人らしく生きることができる社会にしていく必要があろうと思います。一平さんじゃありませんが、ゆっくりと、しかし、たゆむことなく皆の力をあわせていきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

Ⅳ．平成20年度の各活動

1. 「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの事業（概要）

■「認知症サポーター100万人キャラバン」～「認知症サポーター養成講座」の展開

平成17年度からキャラバン・メイト養成研修が開催され、養成されたメイトは、住民向けや職域・学校等で精力的に講座を開催し、72万人を超える「認知症サポーター」が誕生しています。

◇認知症サポーター総数－ 723,368人 （内、キャラバン・メイト総数－ 28,514人）

※「認知症サポーター100万人キャラバン」とは

認知症を正しく理解し、認知症の人や家族を温かく見守る応援者である「認知症サポーター」を一人でも多く増やし認知症になっても安心して暮らせるまちを住民の手で展開していく活動です。各地で「認知症サポーター養成講座」を開催し、サポーターを養成するのが、講師役を担うボランティアであるキャラバン・メイトです。キャラバン・メイトは自治体等と全国キャラバン・メイト連絡協議会とが主催する「キャラバン・メイト養成研修」を受講し、登録された人たちをいいます。

■「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008

本キャンペーンは今年度で5回をむかえ、全国から70の地域活動が寄せられました。これまで応募いただいた活動をデータベース化し、ホームページにて検索いただけるようにしました。昨年度より始まった「認知症地域支援体制構築等推進事業」の全国の担当部署へ引き続き資料提供しました。

■認知症の人「本人ネットワーク」支援

本人ネットワーク支援委員会では、全国各地の家族会やケア関係者の協力を得て、「本人ネットワーク」支援事業をすすめています。この事業は、認知症の方同士が知り合い、意見交換やお互いの経験の共有ができるように、また、自分たちの思いを社会に伝えるために認知症の方同士がつながっていくための支援を行うことを目的としています。

本年度は、本人交流会の立ち上げやその継続的な開催の支援をより一層推進すべく、支援者養成研修を全国9か所で実施しました。支援者養成研修の報告会を実施し、研修後に開催した本人交流会での成果やさまざまな課題を、交流会のさらなる広がりへつなげています。また、「だいじょうぶネット」ではインターネットを利用して本人同士の交流や本人の声を社会に届ける取り組みを進め、インターネットに直接書き込みができない方には代行書き込みを行なうなど支援を行っています。

さらに、啓発用チラシを作成し、本人交流会の地域での取り組みの大切さをアピールしました。

■認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進

認知症の本人と家族が、地域の中で自分らしい暮らしを続けていくために、様々な支援を活かしていくための具体的な計画や見直しをしていくための方法がケアマネジメントです。ケアマネジメントをケアマネジャー等専門職にお任せにするのではなく、認知症の本人や家族が自分たちの思いと力を共通シート（センター方式）を使ってケア関係者に伝え、相談しながら「本人と家族のためのケアマネジメント」を行っていくことを推進しています。

今年度は、本人や家族の勉強会や研修会、継続的な検討会を全国各地で開催しながら、認知症の初期、周辺症状の激しい時期、排泄や食事等の身体的な課題も重複した時期、そしてターミナル期など、認知症の人と家族が迎える長い経過のいつでもどこでも、センター方式を活用しながら「本人と家族が主人公になって地域で暮らし続ける」ためのケアマネジメントの実践例を集積しました。そのような「本人・家族が主体となるケアマネジメント」を自治体として推進する自治体も広がってきています。

2. 『認知症サポーター100万人キャラバン』～認知症サポーター養成講座」実施状況

1. 認知症サポーターの人数

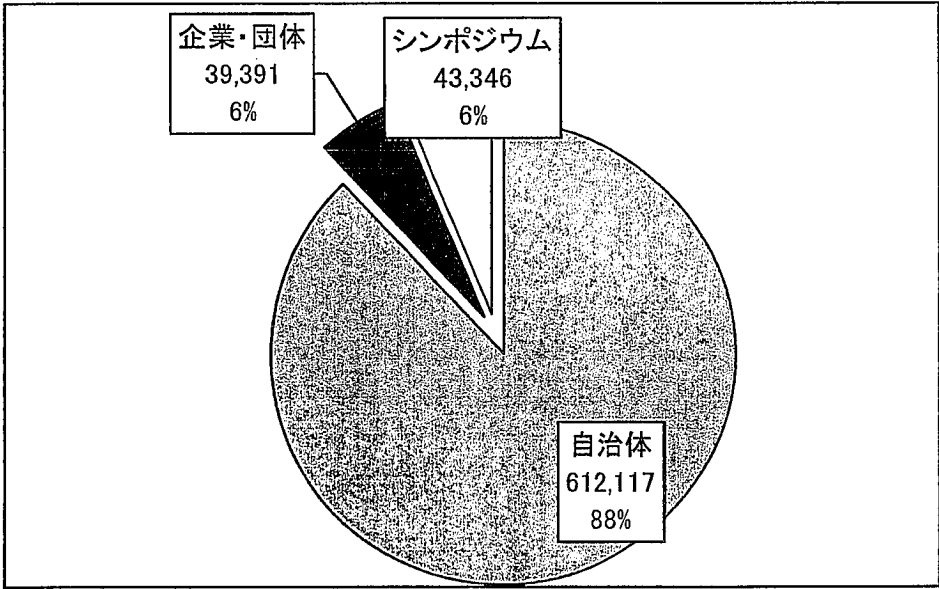
認知症サポーター総数（キャラバン・メイトを含む） 723,368人

認知症サポーター数 694,854人 講座開催回数 17,358回

キャラバン・メイト数 28,514人

合 計		694,854	17,358
	17年度	29,982	323
	18年度	138,739	2,861
	19年度	277,961	6,937
	20年度（～平成20年12月10日）	248,172	7,237
自治体・地域において養成されたサポーター（自治体型）		612,117	16,359
全国規模の企業・団体により養成されたサポーター（企業・団体型）		39,391	813
広域からの参加者によるシンポジウム・フォーラムによるサポーター（啓発型）		43,346	186

※平成20年12月10日現在（平成20年12月14日までに提出された実施報告書に基づく）



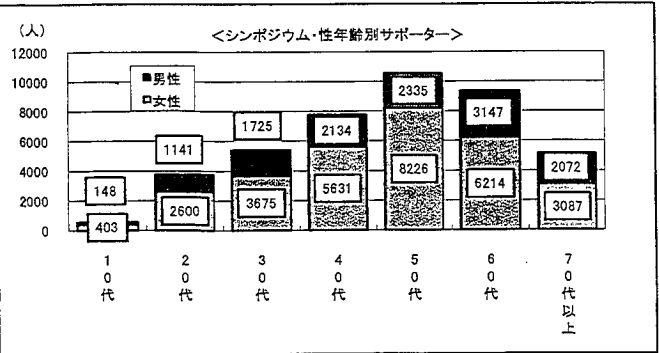
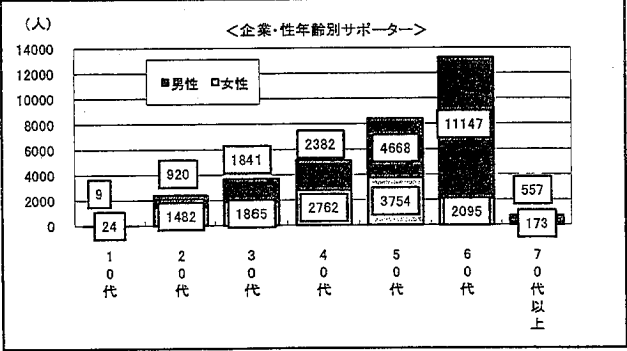
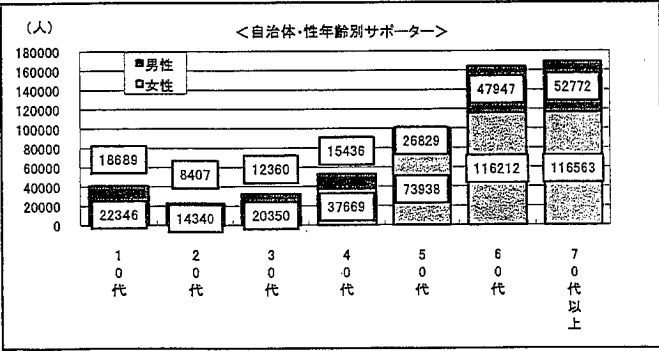
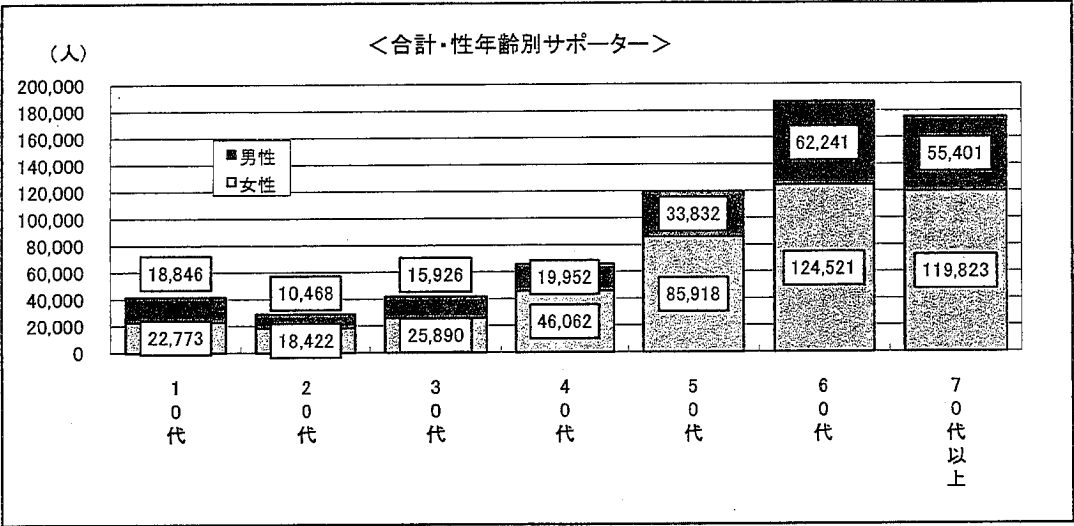
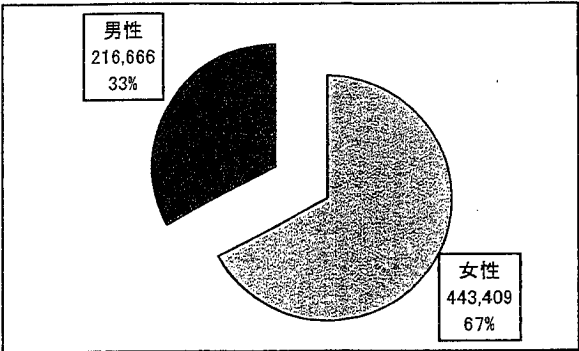
2. サポーターの性別・年代別構成

性別・年代別構成（年代、性別の回答のあったもののみ）

サポーターの男女別割合

	合計		
	女性	男性	合計
10代	22,773	18,846	41,619
20代	18,422	10,468	28,890
30代	25,890	15,926	41,816
40代	46,062	19,952	66,014
50代	85,918	33,832	119,750
60代	124,521	62,241	186,762
70代以上	119,823	55,401	175,224
合計	443,409	216,666	660,075

※年代別の回答がなかったものは除く。



3. 自治体・地域でのサポーター養成

	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	合計
サポーター数	12,042	114,745	255,872	229,458	612,117

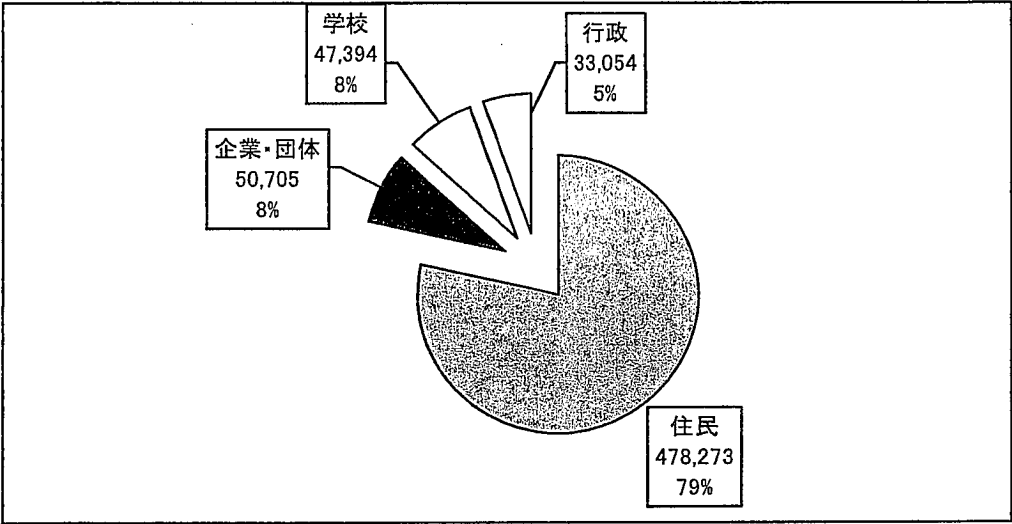
①「認知症サポーター養成講座」実施自治体数 1015 自治体

②事務局設置自治体数 1042 自治体

③受講対象者分類別サポーター数

対象者分類	サポーター数	講座開催数
1 住民	478,273	13,323
2 企業・団体	50,705	1,334
3 学校	47,394	747
4 行政	33,054	875

受講対象者別サポーターの割合



④－１ 都道府県別キャラバン・メイト数、認知症サポーター数

平成20年12月10日現在

	総人口	65歳以上人口	高齢化率	サポーター 講座開催回 数	メイト数	サポーター数	メイト＋サポ ーター数	総人口に占 める割合 (メイト＋ サポーター)	メイト＋サ ポーター1 人当たり担 当高齢者人 口	総人口 10000人当 たりの講座 開催回数
全国	127,066,182	27,411,466	21.6%	16,359	22,853	614,654	637,507	0.502%	43	1.287
北海道	5,571,770	1,279,457	23.0%	1,089	2,010	35,091	37,101	0.666%	34	1.954
青森県	1,430,543	342,850	24.0%	91	184	4,502	4,686	0.328%	73	0.636
岩手県	1,366,652	352,341	25.8%	613	507	26,977	27,484	2.011%	13	4.485
宮城県	2,334,874	495,463	21.2%	328	262	12,519	12,781	0.547%	39	1.405
秋田県	1,130,823	317,054	28.0%	61	262	1,599	1,861	0.165%	170	0.539
山形県	1,194,071	316,371	26.5%	205	153	8,349	8,502	0.712%	37	1.717
福島県	2,075,555	489,889	23.6%	581	399	18,317	18,716	0.902%	26	2.799
茨城県	2,982,000	622,278	20.9%	158	273	9,454	9,727	0.326%	64	0.530
栃木県	2,006,701	415,782	20.7%	273	394	12,031	12,425	0.619%	33	1.360
群馬県	2,012,151	445,145	22.1%	228	198	13,819	14,017	0.697%	32	1.133
埼玉県	7,067,336	1,303,883	18.4%	315	279	12,182	12,461	0.176%	105	0.446
千葉県	6,090,799	1,178,043	19.3%	755	1,099	32,016	33,115	0.544%	36	1.240
東京都	12,462,196	2,435,567	19.5%	1,311	1,460	45,082	46,542	0.373%	52	1.052
神奈川県	8,798,289	1,644,737	18.7%	451	1,135	18,175	19,310	0.219%	85	0.513
新潟県	2,413,103	603,568	25.0%	145	684	4,378	5,062	0.210%	119	0.601
富山県	1,106,340	272,379	24.6%	292	327	10,419	10,746	0.971%	25	2.639
石川県	1,167,151	261,152	22.4%	322	431	11,543	11,974	1.026%	22	2.759
福井県	815,344	192,847	23.7%	233	296	12,940	13,236	1.623%	15	2.858
山梨県	871,481	203,921	23.4%	99	179	3,353	3,532	0.405%	58	1.136
長野県	2,176,806	546,789	25.1%	393	693	9,509	10,202	0.469%	54	1.805
岐阜県	2,095,484	473,233	22.6%	248	528	9,495	10,023	0.478%	47	1.183
静岡県	3,775,400	839,982	22.2%	694	660	29,991	30,651	0.812%	27	1.838
愛知県	7,185,744	1,366,398	19.0%	1,109	888	41,464	42,352	0.589%	32	1.543
三重県	1,856,282	425,896	22.9%	278	546	9,047	9,593	0.517%	44	1.498
滋賀県	1,377,886	269,233	19.5%	606	521	23,609	24,130	1.751%	11	4.398
京都府	2,558,542	565,629	22.1%	687	1,685	20,864	22,549	0.881%	25	2.685
大阪府	8,670,302	1,773,824	20.5%	694	952	25,677	26,629	0.307%	67	0.800
兵庫県	5,582,230	1,187,654	21.3%	562	851	20,861	21,712	0.389%	55	1.007
奈良県	1,419,626	310,776	21.9%	130	219	6,504	6,723	0.474%	46	0.916
和歌山県	1,045,973	264,111	25.3%	112	241	3,724	3,965	0.379%	67	1.071

	総人口	65歳以上人口	高齢化率	サポーター 講座開催回 数	メイト数	サポーター数	メイト＋サポ ーター数	総人口に占 める割合 (メイト＋ サポーター)	メイト＋サ ポーター1 人当たり担 当高齢者人 口	総人口 10000人当 たりの講座 開催回数
鳥取県	602,411	150,052	24.9%	58	174	2,988	3,162	0.525%	47	0.963
島根県	733,123	205,700	28.1%	169	119	6,716	6,835	0.932%	30	2.305
岡山県	1,948,250	461,322	23.7%	256	280	7,791	8,071	0.414%	57	1.314
広島県	2,864,167	639,903	22.3%	344	484	11,849	12,333	0.431%	52	1.201
山口県	1,479,840	391,440	26.5%	315	501	11,591	12,092	0.817%	32	2.129
徳島県	805,951	204,228	25.3%	249	234	7,465	7,699	0.955%	27	3.090
香川県	1,019,333	246,378	24.2%	81	29	3,503	3,532	0.347%	70	0.795
愛媛県	1,471,510	368,229	25.0%	482	428	16,917	17,345	1.179%	21	3.276
高知県	784,038	212,088	27.1%	78	193	3,261	3,454	0.441%	61	0.995
福岡県	5,030,818	1,050,467	20.9%	502	416	18,539	18,955	0.377%	55	0.998
佐賀県	864,738	202,370	23.4%	42	200	1,425	1,625	0.188%	125	0.486
長崎県	1,469,197	362,043	24.6%	80	264	2,671	2,935	0.200%	123	0.545
熊本県	1,844,644	452,408	24.5%	221	289	11,061	11,350	0.615%	40	1.198
大分県	1,215,388	306,661	25.2%	234	184	9,132	9,316	0.767%	33	1.925
宮崎県	1,161,026	284,119	24.5%	33	180	944	1,124	0.097%	253	0.284
鹿児島県	1,739,075	446,385	25.7%	80	369	3,397	3,766	0.217%	119	0.460
沖縄県	1,391,215	231,421	16.6%	72	193	1,913	2,106	0.151%	110	0.518

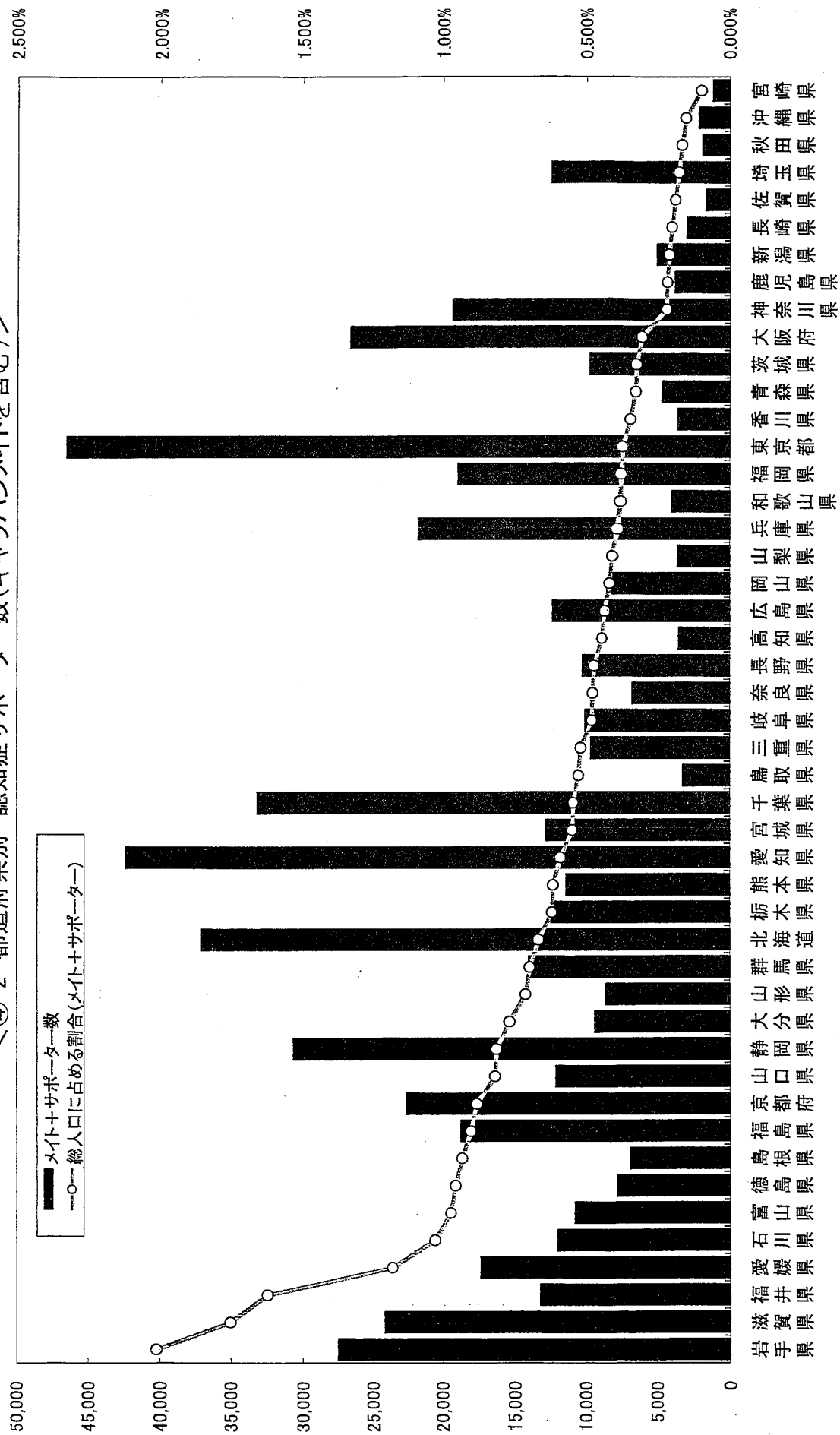
※平成20年12月14日までに提出された登録名簿、実施報告書に基づく数

※窓口：連絡先として設置されている自治体等を含む

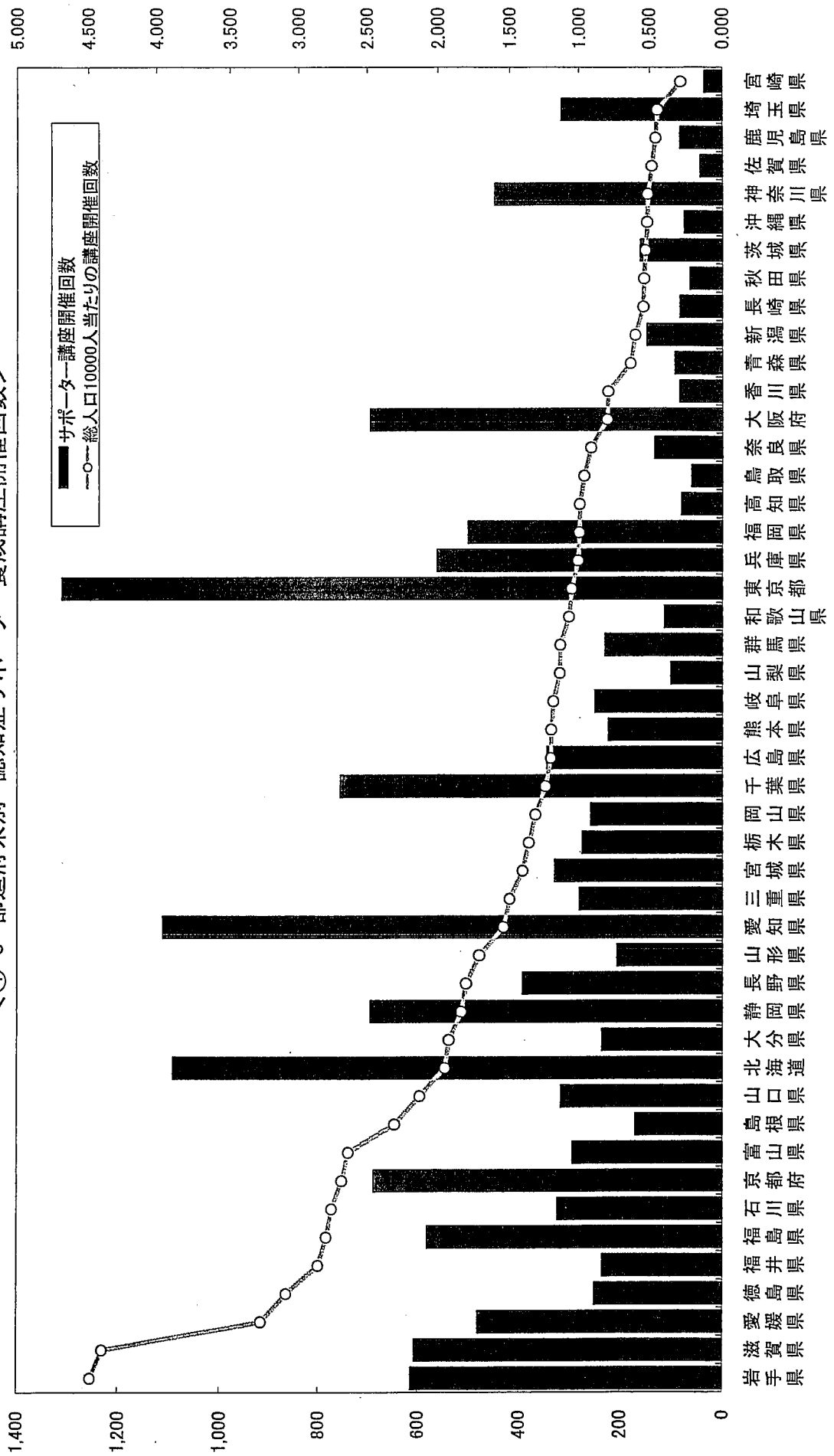
※登録から2年間にわたり講座開催実績のないキャラバン・メイトについては、サポーター数に含む。

※人口、高齢者人口：総務省発表 住民基本台帳による（平成20年3月31日現在）

＜④-2 都道府県別 認知症サポーター数(キャラバンメイトを含む)＞



＜④-3 都道府県別 認知症サポーター養成講座開催回数＞



5. キャラバン・メイトの人数

平成20年12月10日現在

キャラバン・メイト総数 28,514人 研修開催回数415回

* うち36回は全国農業協同組合中央会の暫定報告値（後掲）

①自治体によるキャラバン・メイト養成研修

修了者数	25,390 人
実施自治体数	197 自治体
都道府県	44 都道府県
区市町村等	153 区市町村等
開催回数	355 回

※複数自治体共同による研修は、各自治体を1と数える

②全国規模の企業・団体による研修実施状況

修了者数	3,124 人
実施企業・団体数	15 団体
開催回数	60 回

* うち36回は全国農業協同組合中央会の暫定報告値（後掲）

③自治体によるメイト研修修了者の受講要件内訳

* キャラバン・メイト登録名簿に基づく（複数回答）

受講要件	人数	割合
1 認知症介護指導者養成研修修了者	758	3.0%
2 認知症介護実践リーダー（実務者・専門課程）研修修了者	2,719	10.7%
3 介護相談員	1,920	7.6%
4（社）認知症の人と家族の会会員	809	3.2%
5-1 行政職員（保健師、一般職等）	3,272	12.9%
5-2 地域包括支援センター職員	4,046	15.9%
5-3 介護従事者（ケアマネジャー、施設職員、在宅介護支援センター職員等）	7,197	28.3%
5-4 医療従事者（医師、看護師等）	906	3.6%
5-5 民生児童委員	1,215	4.8%
5-6 その他（ボランティア等）	4,115	16.2%

3.『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2008」(概要)

◆目的

認知症の人の本来の力を活かしてともに暮らす町づくりの活動を全国ではぐくむことを目的として、認知症の人を地域で支える活動を広く全国から募集し、各地域の人々の町づくりの参考となる活動を紹介することを目的とする。

◆主催等

- ・主催 社会福祉法人浴風会 認知症介護研究・研修東京センター
社会福祉法人仁至会 認知症介護研究・研修大府センター
社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター
- ・共催 社団法人 認知症の人と家族の会
- ・協賛 住友生命保険相互会社

◆実行委員会

- 委員長 長谷川和夫〔認知症介護研究・研修東京センター長〕
- 委員 加藤 伸司〔認知症介護研究・研修仙台センター長〕
坂本 森男〔厚生労働省大臣官房審議官（社会、障害保健福祉、老健担当）〕
高見 国生〔社団法人 認知症の人と家族の会 代表理事〕
柳 務 〔認知症介護研究・研修大府センター長〕

(敬称略、五十音順)

◆推薦経過

◇推薦基準

①「認知症を知る」ための取り組み

地域の多様な人々が認知症と支援について理解を広めるための先進的な取り組みがなされている

②認知症の人同士が出会い、話し合い、ともに参加する地域の活動

地域の認知症の人同士が出会い、自分たちの声や力を出しながら、参加する地域での活動が取り組まれている

③地域にある生活関連領域の人々が参画・協働する取り組み

地域での住民生活に関連した多様な業種（商店、交通機関、金融機関など）や関係者が加わった先進的な活動が展開されている

④地域の人々と行政が協働する取り組み

地域の人々と行政とが協働しながら、共に暮らす町づくりを進めている先進的取り組みがなされている

⑤今後や他地域での展開可能性

今後さらに継続・発展する可能性や他の地域でも展開する可能性がある内容や方法である

◇一次推薦

平成20年11月14日開催の一次推薦委員会で推薦基準にもとづいて検討し、16の地域活動を推薦候補とした。

◇最終推薦

平成20年12月18日開催の地域活動推薦委員会（最終推薦委員会）では、まず全委員によって16の地域活動について慎重に検討を行った。続いて、委員長の司会のもとで各委員からそれぞれの活動に対する推薦理由および課題点が述べられ、活発な討議の結果、全員一致で7つの地域活動を「町づくり2008モデル」に決定した。

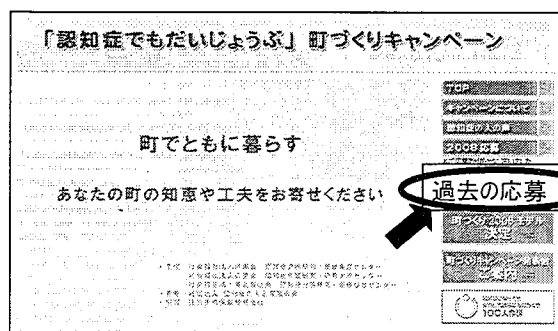
地域活動推薦委員一覧

委員長	堀田 力	[財団法人 さわやか福祉財団 理事長・弁護士]
委員	池田 恵利子	[いけだ後見支援ネット 代表]
	江川 紹子	[ジャーナリスト]
	勝田 登志子	[社団法人 認知症の人と家族の会 副代表理事]
	北橋 健治	[福岡県北九州市 市長]
	児玉 桂子	[日本社会事業大学 教授]
	辰濃 和男	[日本エッセイスト・クラブ 理事長]
	藤井 克徳	[きょうされん 代表]
	町永 俊雄	[NHKキャスター]
	村上 達也	[茨城県東海村 村長]
	村田 幸子	[福祉ジャーナリスト]
	吉田 一平	[ゴジカラ村 代表]

(敬称略、五十音順)

<http://www.dcnnet.gr.jp/campaign/>

または「町づくりキャンペーン」で検索してください



町づくりの
取り組みを
ご覧頂けます。

町づくりの
取り組みを
検索頂けます。

※平成19年度に開始した、「認知症地域支援体制構築等推進事業」の全国の担当部署へ引き続き、当キャンペーン資料を提出させて頂きました。

町づくりのさまざまな取り組みが
ご覧頂けます。ぜひアクセスを！！

「認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーン」の検索結果画面。検索条件として「認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーン」が設定されている。検索結果として「認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーン」の検索結果が表示されている。

「認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーン」の検索結果画面。検索条件として「認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーン」が設定されている。検索結果として「認知症でもだいじょうぶ 町づくりキャンペーン」の検索結果が表示されている。

1. テーマ別: 権利や暮らしを守る
2. 取り組んでいる人・団体: 検索条件なし
3. 都道府県: 東京都
4. 年度別: 検索条件なし

検索

4. 「認知症の人『本人ネットワーク』支援」活動報告

認知症・本人ネットワーク支援

1. 平成 20 年度事業概要

本人ネットワーク支援委員会では、認知症の人と家族の会や認知症介護研究・研修東京センターと連携し、全国各地の家族会やケア関係者の協力を得て、「本人ネットワーク」支援事業をすすめています。この事業は、認知症の方同士が知り合い、意見交換やお互いの経験の共有ができるように、また、自分たちの思いを社会に伝えるために認知症の方同士がつながっていくための支援を行うことを目的としています。

本年度は、本人交流会の立ち上げやその継続的な開催の支援をより一層推進すべく、支援者養成研修の教材開発を行い、全国 9 箇所で研修を実施しました。支援者養成研修の受講者からは、その後どのような実践を行ったかレポートを提出してもらい、報告会を実施しました。研修後に開催した本人交流会での成果やさまざまな課題を、交流会のさらなる広がりへつなげています。

また、これまで出会った認知症の方が全国から集まって、話し合い、スポーツ大会など交流を行いました。この再にも、今後の本人ネットワークについて思うことや、今の気持ちなどを、本人からヒヤリングを行いました。

さらに、「だいじょうぶネット」ではインターネットを利用して本人同士の交流や本人の声を社会に届ける取り組みを進め、インターネットに直接書き込みができない方には代行書き込みを行なうなどの支援を行っています。ネットが見られない人のために、情報誌の作成を行いこれまでの本人交流会参加者、研修参加者に配布しました。携帯電話から見たり、書き込みができるように掲示板も設置しました。

2. 支援委員会

(1) 委員会メンバー（*委員長）

○家族の会等関係者

認知症の人と家族の会 高見代表、松本常任理事*、勝田常任理事

彩星の会 干場代表

○支援者の立場

滋賀県 田淵よしみ

浅香山病院 柏木一恵

認知症介護研究研修東京センター 永田久美子

大阪市社会福祉研修・情報センター 沖田裕子

3. これまでの事業の流れ

事業1年目（2005 年度）

- * 本人の意思をくみ取る活動が国内で、どのように取り組まれているかについて調査
↓ そのノウハウを元に

事業2年目(2006 年度)

- * 本人会議の実施 本人からのアピール
↓ 認知症の本人が求めていることを社会に知ってもらう

事業3年目（2007 年度）

- * 全国的な本人交流会を実施
- * モデル地域での本人交流会の実施
- * 支援者養成研修のあり方を考える
↓

事業4年目（2008 年度）

- * 支援者養成研修のための研修教材の開発
- * 支援者養成研修の実施 9地域
- * 本人ヒヤリング
各地域でも本人同士の交流がされつつある

4. 支援者養成研修

1)研修の目的

本人交流会を行うことによって、認知症の本人同士が意見交換や、経験を共有でき、自分だけが認知症で悩んだり、つらい思いをしているわけではないことを知ることができることがわかってきました。認知症の人は、介護者との関係だけでなく仲間を求めています。

本人同士が語り合うためには、司会や進行などに工夫が必要です。

この研修では、認知症の人たちの話し合いや、交流の場・仲間作りを支援する人を育成します。

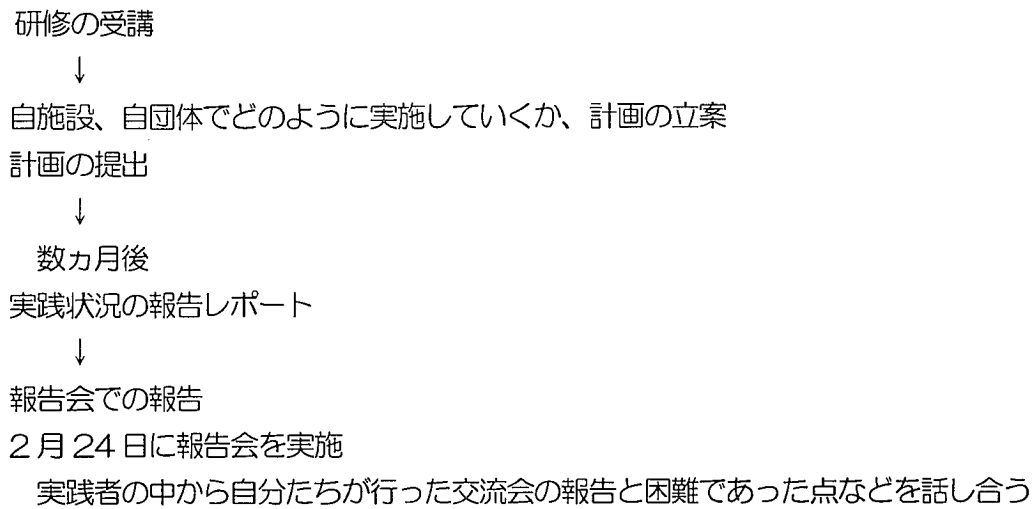
2)対象

「家族の会」支部世話人、地域包括支援センター職員、病院の医療ソーシャルワーカー、デイサービス・グループホーム等の職員等

3)研修内容

- ・ 講義・DVD による学習による(本人交流会の様子、必要性を紹介する)
- ・ ロールプレイによる体験学習
- ・ 意見交換
- ・ 自施設、自団体でどのように実施していくか、計画の立案
- ・ 計画の提出

4) 研修から報告会の流れ



5) 実施日程と参加者状況

開催日	場所	参加人数	男性	女性	家族の会 支部 参加者	家族会 会員	包括支援 センター	DS	GH 特養	病院	その他
2008年10月12日	高知	22	2	20	15	0	2	0	1	3	1
2008年10月13日	東京	17	4	13	1	4	0	1	1	1	9
2008年11月9日	宮城	25	5	20	16	0	0	1	2	2	1
2008年11月16日	大阪	50	8	42	1	1	10	6	26	0	6
2008年12月7日	宮崎	25	4	21	10	0	4	0	2	2	11
2008年12月7日	札幌	24	6	18	3	0	5	4	5	0	1
2009年1月18日	滋賀	34	6	28	16	0	6	6	2	0	4
2009年1月25日	富山	35	9	26	19	0	2	4	5	1	7
2009年2月7日	熊本	22	9	13	12	0	2	0	0	3	5
合計		254	53	201	93	5	31	22	44	12	45

DS：デイサービス、GH：グループホーム

6) 実践結果と困難、今後の研修希望

研修の参加者は、総数 254 人でした。研修の最後に実施計画を提出した人は、札幌の実施後までで 91 人で、そのうち 2009 年 2 月 24 日の報告会までに実践の有無の報告があったのは、24 人でした。

実施できたという人は 11 組（うち当初本人の参加を計画したが家族のみだった 1 組）、計画している人は 4 組、実施予定がまだないという人は 9 組でした。（研修受講者 2 人で 1 つの報告あり）

<実施できたグループの感想・よかったこと>

若年認知症のつといでの実施

- ・ 本人たちの気持ちを安心して言える場を提供できたと思う。ある方は『この人たちは何て優しい人たちの集まりなのか、私はかつてこんな場所に行ったことはない』と話された。

デイサービスの実施

- ・ 帰宅願望を常に口にする人が、交流会では集中し、質問に対して積極的に答えてくれた。」などの報告がありました。

グループホーム

- ・ 物取られ妄想のある方はそのことを会議で相談される。人が話しているときに別の話をした人を利用者がたしなめられる。「色々と決めることは難しくて大変なこと」を会議を聞きながらおっしゃる。普段あまり表情のない方が、会議になると大きく目を開き、話している人をじっと見てうなずかれる。

アートワークでの実施

- ・ ただ、アートワークをしたり、販売したりということだけでなく、そのことを話し合いでひとつひとつ共有していくことが大切だと思った。

<実施上の困難>

実施できたグループ

- ・ 今後はご家族と一緒に本人も参加してもらえる企画を作ることでご本人の参加につなげてゆきたいと思います。参加したくなる企画を考えています。食事会・カラオケなどご本人の興味をひく事を実施してゆく事で、仲間を増やし本人の思いが話せるような会にしてゆけたらと思っています。
- ・ 参加された本人の中で、認知症のことをきちんと告知されていない方がいて、他の方が病気のことを話しているときどう感じているのか心配になった。家族も一緒に席で行ったが、家族を気にしている様子が見られた。家族も同様に、本人の話すことを心配しながら聞いておられた。
- ・ 集団トークについて、認知症の軽重により、どの程度の介入をしたらよいか嫌気の反応の読み方などが問題であった。その話題に関心をもたない人への関わり方など
- ・ 本人の気持ちが十分出し切れなかった。
- ・ プログラムの時間の合間に実施したので、時間に制限が生じた。プログラムの一つとしてやるには対象人数が多くなるので、十分な時間が取れるように考慮する必要がある。
- ・ 大きなテーマだと理解してもらいにくく、好きな食べ物といっても思い浮かばなくて、「何でもいいよ」という意見になってしまう。

- ・ 場所はどこが良いのか？普通のデイサービスのため、1つのグループのみが交流会をしていると集中できない。他のグループは別のことをしている。参加者をどう選ぶか？サポーターを増やすにはどうしたらよいか。テーマ選び。

計画しているグループ

- ・ 地域そのものの認知症に対する理解不足とネットワークの必要性についての認識不足。
- ・ 県内がアクセスが悪く集うのがなかなか困難でどの位置で開催するかは大きな課題です。会場の問題も大きいです。
- ・ グループホームなどでの開催については、職員の方に説明の機会が少なく困った。

実施予定がまだないグループ

- ・ ニーズが把握できない。本人会議について知らない人が多く、必要性について理解が得られにくい。
- ・ デイサービスなどで実施したいと考えているが、デイサービスの認知症以外の利用者の方などとのスケジュールの流れをまだ工夫できない。関係職員への本人交流会の大切さの理解が十分得られない。認知症の人や家族の気持ちを理解できる専門医がいない。家族の抱え込みで、介護者の気持ちを訴えるだけで、本人の気持ちを引き出す機会がない。

<今後の研修希望>

実施できたグループ

- ・ 本人が参加したくなるような企画をもっと知りたいです。
- ・ 認知症の方の話をじっくり聴く姿勢を持つことを指導、研修してほしい。実際の本人会議の様子をビデオで見ての研修。もう少し時間をかけてもよいと思う。
- ・ 認知症のレベル度に応じた介入(対応)の仕方、話題(関心事)の振り方、レベルが軽度でよくしゃべれる方の扱い(他の人とのバランス)など集団トークでの心得をお願いしたい。
- ・ 支援する上で困った状況(帰宅願望・被害妄想・本人同士のトラブル)に対して、支援者がどのように関わるのがいいのか、対応や会話術、具体的なケースが知りたい。
- ・ 立場を変えたロールプレイ
- ・ 本人、家族の多様なニーズに個々に対応するための幅広い実践的な研修。
- ・ 交流会のことを世の中にPRしてほしい。当初自分ひとりで実施し、ある程度効果があれば仲間を研修に誘い全員で実施する予定でいたが、あまりにも理解が得られない。

計画しているグループ

- ・ 地域でどのように展開してきたか、事例研修。
- ・ 宮崎では、包括支援センター職員に多く参加していただきました。地域づくりの中心になっていく人だと思いますので、地域の広がりの方には支援者になってもらいたい。このような意識を高めて行くことが必要ではないでしょうか。
- ・ 地域でどのように展開してきたか、事例研修。

実施予定がまだない

- ・ グループ討議やロールプレイの必要性
- ・ 本人の話しあう意味・大切さが研修に参加すると本当によく理解できるが、まだ専門職の中にも理解されていないように思う。本人交流会を開こうおと思う仲間を増やせる方法も教えてもらいたい。
- ・ DVDや資料など、サポーターや家族へ説明するものがあれば助かる。

5. 本人交流会、本人からのヒヤリング

これまで出会った認知症の方が全国から集まって、話し合い、スポーツ大会など交流を行いました。この再にも、今後の本人ネットワークについて思うことや、今の気持ちなどを、本人からヒヤリングを行いました。この交流会は、世話人の方だけでなく、認知症の本人がEメールや郵便による交流会の呼びかけ、企画、実施、交流会での写真を集めてCDをつくり参加者へ配布されるなど主体的な活動のもと実施されました。

＜交流会の様子＞

2008年5月、10月と2回目の笹川のつどいが実施されました。

■5月の交流会

5月は、大阪から1夫婦、関東から1夫婦と1人、広島から2夫婦、大分から1夫婦の参加で、地元の本人や家族と交流しました。卓球・バトミントン大会では、優秀者にトロフィーの授与があったり、おいしい山菜、カニなどの海の幸に舌鼓をうったりと楽しい時間を過ごしました。その後、黒部にも行きました。

ー5月の交流会で出された意見ー

- ・ 本人のネットワークとは何で、メンバーはどういう人なのか知りたい。
- ・ パソコンの打てない人は、家族が代わりに打ってブログなどに参加してもらいたい。
- ・ 家族はできるだけ、本人の意見をそのまま載せてほしい。
- ・ 家族のつどいのように、本人版がほしいが、本人がどこにいるかわからない。
- ・ 話せる人がもっと参加してくれるとよい。
- ・ たまには会って話し合いたい。
- ・ メールだけでなく、声を聞いて話したい。文章で伝わらない情報がほとんどだから、表情を見ながら話したい。
- ・ メンバーを固定して信頼関係を続けたい
- ・ 聞き上手のスペシャリストがちょっとずつ階段を上るようにすればいいか。個性が強い人が多いから、からまった糸をほぐすのは大変。
- ・ メンバーを固定して信頼関係ができないと。本人によって障害の違いがあるので、司会が個性を理解していて話し合いの場を持ててもらいたい。本人同士だと何を話していいのかかわからない。話したことも忘れてしまう。

■10月の交流会

10月の交流会では、5月の写真の上映会があり、皆とバトミントンをしたつもり、黒部にも行ったつもりになりました。

10月の交流会までには、前回の参加者に事前に前回の思い出写真集のCDが送られ、再び思い出をつくりましょうと声かけられました。この思い出写真集CDは、認知症の本人が皆の写真を集めて作ってくださったものです。今回も上映会をして、一緒にこんなこともあったよね～と思い出す作業・・・

10月、関東から1夫婦、広島から1夫婦の参加でしたが、地元のニューフェイスも加わったにぎやかなつどいになりました。

さて、この山の家をちょっと紹介させていただきますと・・・ご主人からお聞きすると、150年近い家屋をリフォームしたのだとか・・・りっぱな梁、囲炉裏、広い座敷・・・この広い座敷のおかげで皆泊まらせてもらうことができます。地元から初参加者の本人さん「なつかしいですね」と囲炉裏を囲んでの本人交流会で話されていました。本人交流会では、次回のやりたいこととして、カラオケ大会、梨狩り、稲刈り、黒部、温泉、花見などの意見が出ました。

また、この山を家のつどいの副産物として、5月に撮った黒部の写真をもとにカレンダーを作成しました。



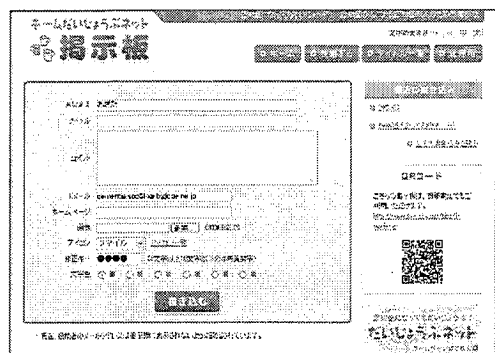
本人の言葉から

- ・ 24時間つきあっている家族は大変だと思う。
- ・ ある程度、本人の意にそまないことがあっても自分を責めないでほしい。長く介護を続けていくためには大切なことです。
- ・ ふたりだと煮詰まってしまうと、変化があるようにいろんな人に来てもらったり、会ったりするのがよいと思う。
- ・ 本人が来た人と話ができるように本人にも話題をむけると、本人も楽しめる。
- ・ 新しい人や久しぶりに会う人の名前が出てこないと思ったりする。話も続かない。
- ・ よく知っている人があの人とわかって名前を言ってくれると助かる。
- ・ 目標が必要。世の中に役立つということに意味がある。
- ・ 入所するとすることがなくなる。本人を良く知っている人が話をしてくれるとよいと思う。
- ・ 本人の自分史、どういう気持ちでしたかなど、話してもらってスタッフが書き取るなど、話の種を聴きだしておいてほしい。毎回同じでもいい。

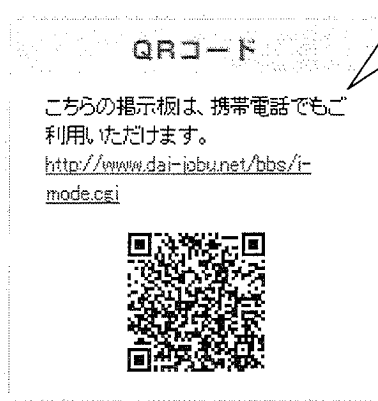
6. 情報発信

○インターネットによる交流

ホームページでは、ブログや掲示板への書き込み



携帯電話からも書き込みが可能になります



こちらの掲示板は、携帯電話でもご利用いただけます。

<http://www.dai-jobu.net/bbs/iphone.cgi>

○通信による情報提供

インターネットの利用が難しい人のために紙媒体で通信を届けます。

連絡・お問い合わせは

本人ネットワーク支援委員会

ホームページ：<http://www.dai-jobu.net/>

メールアドレス：info@dai-jobu.net

事務局：社団法人認知症の人と家族の会

〒602-8143 京都府京都市上京区堀川丸太

町下ル京都社会福祉会館内

TEL：075-811-8195

FAX：075-811-8188

ホームページ：

<http://www.alzheimer.or.jp/jp/index.html>

メールアドレス：office@alzheimer.or.jp

だいじょうぶネット 創刊準備号

2008年 月 日

発行 本人ネットワーク支援委員会

だいじょうぶネットへ皆さん
の声をよせてください！



認知症・本人ネットワーク支援委員会では、『チームだいじょうぶネット』というホームページを通じて、認知症の人同士の交流、社会に認知症の本人の声を届けていく取り組みをしています。

ご本人が自分で、ご家族、ケアにかかわっていらっしゃる方々が代行して「本人の声」をとどけていただけませんか。

インターネットへの直接書き込みが出来る方 印 をお渡ししますのでご連絡ください。

チームだいじょうぶネットアドレス
<http://dai-jobu.net/deblog/blog/>

インターネットへの直接書き込みが苦手と言う方は、お手紙、FAX、メールでご意見を寄せてください。ページの管理人が代わりに書き込みをいたします。

【お手紙やお書きの場合】

住所：〒602-8143

大阪府東成区東小橋1-1-6

宛先：

認知症の人と家族のサポートセンター

本人ネットワーク支援委員会

だいじょうぶネット「本人の声」係り

【FAXの場合】

06-6972-6490

だいじょうぶネット「本人の声」係り

【Eメールの場合】

dementia.epc@kix.biglobe.ne.jp



管理人紹介コーナー

だいじょうぶネットの運営を管理して頂く管理人を紹介します。



「だいじょうぶネット」の管理人をさせて頂くことになりました山口 洋明（せきぐら ひろあき）と申します。

本人と家族が、安心して 自分らしく暮らし続けるための 支援を共に築く

認知症の人や家族の力を活かした ケアマネジメントの推進

認知症介護研究・研修東京センター

認知症の人を支えるための医療・ケア・地域支援が
一步一步、発展してきています。

今、それらを必要としている
本人や家族にそれらが届き、
一人ひとりが
安心して暮らし続けられる
地域になっているでしょうか？

本人や家族が、医療やケア、
地域支援を受ける一方の存在
ではなく、当事者ならではの
声と力を関係者に伝えながら
個々にあった最適な共同支援
(医療+ケア+地域支援)を
共に創りだしていく地域に
なっているでしょうか？

本人や家族の思いと力を活かしたケアマネジメントの推進を

本人・家族の声や力を、伝えよう！

伝わりにくいことを、シートを使って具体的に！

本人の姿と気持ちシート 【C-1-2】

家族の気持ちシート 【B1】

日々の思い、人にわかってほしいことを
ありのままを話してみよう。メモしよう。

センター方式シートの
いろいろ、1枚でもOK!

これまでの経過シート【A1 / A2】

認知症になり始めからこれまで、何が起こったか。
今後の方針決めに大切な情報。

今、起きていることシート

今の暮らしや介護で起きている事実を。

本人の生活史シート【B2】

少し立ち止まり、生活の歴史を振り返ってみよう。
その中に安心や安定の手がかりが、いっぱい。

・日々、一週間の本人の変化、そして

家族なりの介護の努力・工夫 【D4・D3】

・暮らしの現状と本人の心身の力 【D1・D2】

・本人の心身と医療の全体 【C1・B2】

・人やサービスとのつながり 【A4】

本人のなじみの暮らし方シート

どこでも、誰にでも「大切にしてほしいこと」を。

・本人の習慣・好み 【B3】

・住まいや生活環境 【B4】

支援してほしいことをまとめるシート（ケアプラン導入シート）【E】

本人と家族が支援してほしいこと、支援してほしい時間帯、具体的に伝えよう。

生活していく上での、本人・家族なりの工夫やアイデアも、伝えよう。

この活動のねらい

本人や家族が、共通シート（センター方式）を使って
自分たちの声（生活の現状や思い）や力を支援関係者
にうまく伝えていくことを推進します。

共通シートをもとに、本人・家族・支援関係者が、
対話と関係を深めながら、個々にあった共同支援
（医療＋ケア＋地域支援）を共に考え、創りだして
いくケアマネジメントを推進します。

＊センター方式シート：認知症ケアのための全国共通シート

認知症の初期からターミナルまで、関係者が共通シートを用いて、
情報を一本化しながら、本人と家族の生活を継続的に支えていくための方法。
（詳しくは、資料末の書籍参照）

●シートは、ホームページ「いつどこネット」から無料で入手できます。

平成20年度の取り組み

1. 本人や家族が、声や力をセンター方式を通じて支援関係者に伝え、ケアマネジメントや支援をよりよくしていく取り組みを多様な場で推進

- ・ 本人が参加する自治体の講座等
- ・ 家族が自主開催の学習会
- ・ 本人・家族とサポーターのリンク 等

2. 自治体・地域単位での、本人・家族が参加した多職種研修・検討会の推進

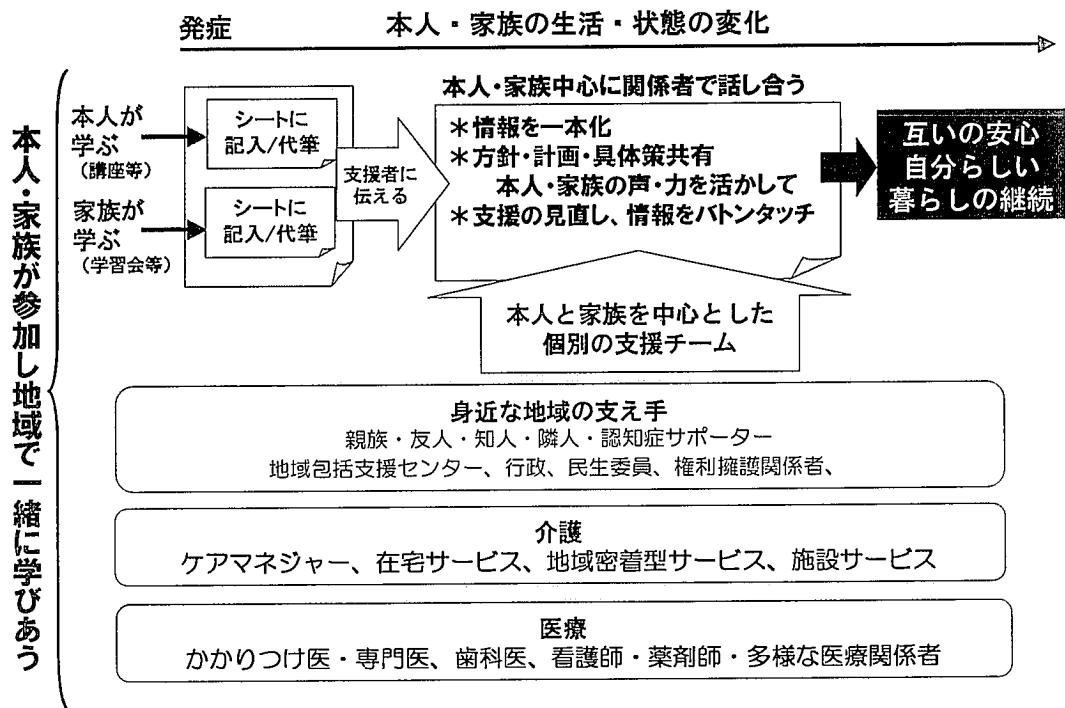
3. 本人・家族の声と力を活かしながら、ケアマネジメントと共同支援を行った事例の蓄積

- * 認知症の初期からターミナルまで
- 様々なステージで、本人と家族が安心して自分らしく暮らしていく姿

4

情報を広く伝える
ホームページ・「ついでに」ネット

本人・家族の声と力を活かしたケアマネジメント・共同支援の推進



1. 本人・家族が学ぶ機会をつくる

.....

* 多様な講座・学習会等の機会に

- ・自治体、地域包括支援センター等が開催する健康講座、介護予防教室、介護者教室等

- ・社会福祉協議会や地域の認知症関連の講座

- ・事業者(デイサービス、グループホーム、施設等)が開催する家族や地域向けの講座

* 介護中の家族が地域の仲間と共にセンター方式活用について学ぶ自主学習会を開く

- ・家族の会、地域の家族会や、支える会等

＜介護予防教室等での取り組みの例＞

◇地域包括支援センターが開催

◇参加者は、地域の高齢者約30名。

- ・教室の広報を見て、自主的に参加した人。
- ・健診等を通じて、職員が声かけをした人。

プログラム

20分：職員による講話：センター方式のねらい・活かし方

40分：参加者同士数名のグループで、
センター方式のシート（2枚）をみながら話しあい。
・なじみの暮らし方シート（B3シート）
・支援マップシート（A4シート）
大事にしたいことをシートにメモ。

30分：全体でミニ報告、話しあい

～ 参加者の感想より ～

①生活史シートを使って話しあったり、メモをしてみても

- 近頃、忘れっぽくて自分で自分が嫌になってたけど、
こうして、昔のことを話してたら、つるつる出てきた。
今日は、忘れてしまうことより、覚えていることを
大事にする、っていうことがわかってよかった。
- こうしたことを、書けるうちに書いとかなないと、
誰もわからないと思う。
もう少しちゃんと書いて、息子や娘に渡してみたい。
- もう、先は暗い・・・なんて思いがちだったけど、
これまでにいろんなことがあったなあ、楽しいこと、
がんばったことが思いだされて、この先の人生、
自分でしっかりしていこうって、思いました。

②支援マップシートを使って話しあったり、メモをしてみても

- 夫もなくなり、子供たちもみんな独立して今は一人。
「独居老人」なんて心配されちゃうけど、こうやって
みると、いろんな人とつながってたり、私なりに
お役にたってることもある。こうした人たちとこれからも
楽しくやっていきたい。
- 最初、家族や数人の知人しか思い浮かばなかったが、
こうしたもので具体的にやってみると、それなりに
身近に人がいたり、知らなかった行政のサービスも
近くにあることがわかって、今日はよかった。

この講座をきっかけに、シートをもとに、本人と地域包括支援センター等
の職員との具体的な相談が始まり、医療につながったり、家族支援（相談、
地元家族会へのリンク）に進んだ人もでています。

＜家族がセンター方式活用の自主学習会を続けている例＞

- ◇地域の家族会のメンバーから「センター方式を自分たちで学んでみよう」と声が上がり、介護中の家族を中心に10名ほどで勉強会をひらく。
- ◇1回目は、テキスト等をもとに、話しあい、とにかく書けそうなシートから家族が知っていること、ケアマネジャーやケア関係者、医師に伝えたいことを、次回の勉強会までに書きだしてみようということに。
- ◇2回目（3か月後）、それぞれが記入したシートを持ち寄り記入してみた感想、気づいたこと、活かし方について話し合い。
→次ページ参照。
- ◇3回目（3か月後）
センター方式をよく知っている専門職（看護師）を招いて、それぞれが記入したシートをもとにしながら、実際の活かし方について、話しあう。

～家族の自主学習会参加者の感想より～

- △プロには、言えない、わかってもらえない・・・と半ば、あきらめの境地だったが、自分の方から伝えていく方法がわかってよかった。
- △ケアマネに使ってみたい、と言ったら「もう使っています」と言われて驚いた。
- △1回目を終えて、家族でいろいろ話をしながら書いてみた。その中で、家族同士でも伝わっていなかったこと、わかっていなかったことがわかって、たった1枚のシートだったが、家族同士がずいぶんスムーズになった。今度は、これをケアマネさんらと一緒に使っていきたい。
- △本人のことが具体的によくわかるようになった。本人の思いは家族でないとなかなかわからないし、こうしたシートを使わないと、ケアマネさんらにはわかってもらえない。
- △今、本人の認知症が進んでしまっている。早い段階からこうした方法を、家族にしっかり伝えてほしい。

2. 本人・家族が参加して地域で共に学ぶ機会を作る

- ・自治体、地域包括支援センター、事業者団体、社協、地元の研究会等が地域で開催する認知症関連の研修会の際、できるだけ地域の多様な専門職によびかける。
- ・同時に、本人・家族にも参加をよびかける。
- ・参加者が、できるだけ身近な地域単位でグループをつくって着席し、事例をもとに一緒にセンター方式の1～2枚のシートを使ってグループワークを行う。



みんながひとつのテーブルで話し合う

サポート医、かかりつけ医、ケアマネ、
在宅サービス、施設サービス、病院、
民生委員、家族会関係者、
介護中の家族

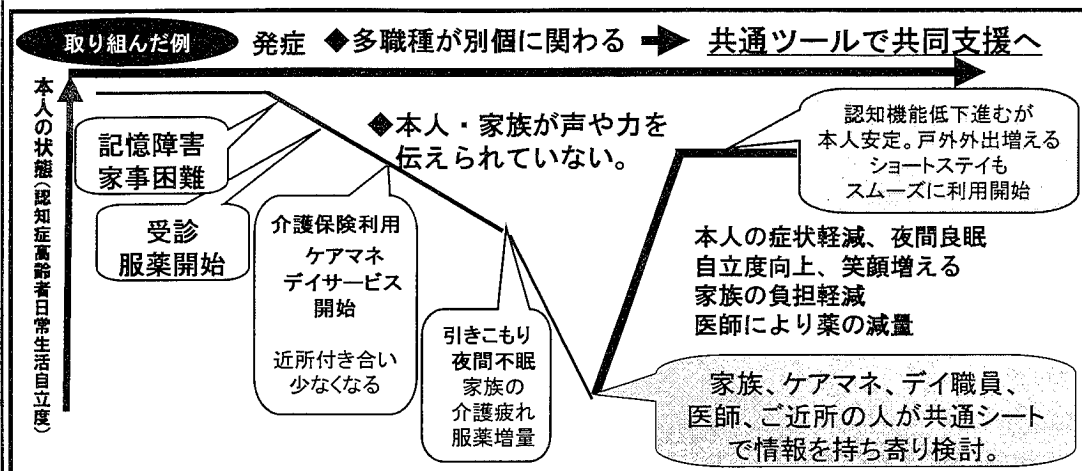
次回は本人さんにも参加してもらおう!

～ 共同研修を開催した各地からの声 ～

- △（家族）夫がどんどん悪くなっていく中で、泣いてばかりの毎日だったが、参加してみて、近くにこんなにいろんな人たち（専門職）と一緒に話し合いができる先生がいるのがわかって今日は嬉し泣きです。
シートと一緒に話すと、本人のことも、家族のことも、自分たちが伝えないと、専門職もわかっていないことがたくさんあるのだとわかりました。
- （医師）こうした機会がないと、地域包括とか、ケアマネとかわかっているようで、じっくり話したことがなかった。家族の本音もわかってよかった。このシート（C-1-2、D4）の2枚でいいから、受診の時はもってきてもらいたい。
- （行政担当者）共通のツールを使って、いろんな立場の人が一緒に話し合うとこんなに盛り上がると思わなかった。
利用者本位、協働が動き出す大きな一歩になった。

3. 本人・家族を中心に、共に創るケアマネジメントと 共同支援へ：共通ツールで一体的に

本人・家族の声や力が活かされないまま、不安と生活難で苦しんでいる人が地域に多数います。今年度、初期からターミナルまで共通ツールを使って、本人・家族の声と力を活かした共同支援の成果が多数報告されています。

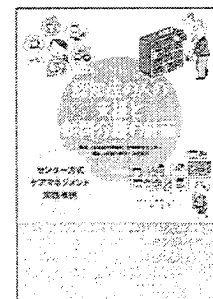
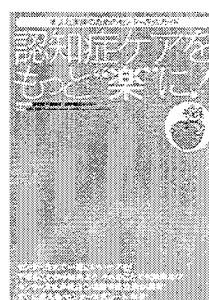


本人と家族自身が、声と力をだしていこう。
その「声と力」を活かした共同支援を地域で進めていこう。

参考 センター方式を地域の「共通の道具に」

シート1枚からでも、気軽にメモしてみよう。一緒に話してみよう。

- ①「認知症ケアをもっと楽に」
本人・家族が使うセンター方式
(中央法規、2008)
- ②「センター方式シートパック（解説付）」
1冊あると、コピーして使えます
※お問い合わせは、
認知症介護研究・研修東京センターまで
電話 03-3334-1150
ファックス 03-3334-1256
メール cmr@itsu-doko.net
- ③改訂 「認知症の人のためのセンター方式の
使い方・活かし方」（中央法規）
- ④「認知症の人の支援と訪問介護計画、
センター方式実践事例（中央法規）」
- ⑤ホームページ：いつでもネット
<http://itsu-doko.net>



6. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議の啓発・普及活動

■会員について ※会員一覧はP.69をご参照

現会員数－100団体・個人

※第1回100人会議(発足時)－82団体・個人、第2回－96、第3回－100、以後同様

■ホームページ、映像DVD・啓発リーフレット配布、海外での紹介

◇キャンペーン報告会の映像DVDを全市区町村に配布(6月)

◇ホームページにて「認知症でもだいじょうぶ」町づくり事例の検索サイトを開設(9月)

※ホームページを適宜更新

◇全国各地の講演会など(約70ヵ所)にて啓発リーフレット約24,500部を配布

◇国際アルツハイマー病協会オーストラリア支部主催の

豪日共同シンポジウムで本キャンペーン取り組みを紹介(9月)



<http://www.ninchisho100.net>

認知症 100人会議

検索

■啓発活動(一部抜粋)

7月	認知症フォーラム(7/25 開催、東京、主催:読売新聞、NHK)にて啓発リーフレット配布
9月	世界アルツハイマーデー(9/21)記念イベントへ協力ー記念講演会、全国での街頭一斉活動、等
	もの忘れフォーラム(9/23 開催、東京、主催:朝日新聞)にて啓発リーフレット配布
10月	介護保険推進全国サミット(10/16,17、茨城)にて啓発リーフレット配布
	「市民発!介護なんでも文化祭」にて、ブース出展(10/25)

◇昨年度にひきつづき、「認知症地域支援体制構築等推進事業」へ資料を提供

<平成20年度マスコミに掲載された記事・番組(一部抜粋)>

■新聞・雑誌掲載

4～5月	新聞各紙・雑誌各誌:「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会について
9月	朝日新聞:「認知症サポーター続々活動の場づくり、課題」(9/17)
	かいごの学校:「認知症でもだいじょうぶ」な町づくり活動について(9月号)
11月	ふれあいケア:認知症でもだいじょうぶ町づくり事例検索ホームページサイト開設(11月号)
	朝日新聞:「認知症高齢者、野外で交流ー街づくりのきっかけに」(11/5)
	毎日新聞:「認知症 地域全体がケアを」ー本キャンペーンの紹介(11/11)

※ほか、全国各地でのサポーター講座開催について記事多数

■テレビ・ラジオ放映など

5月	NHK教育:日曜フォーラム「認知症を支える～本人・家族の暮らしと地域」にて取り組み紹介(5/25)
7月	NHK教育:福祉ネットワーク「シリーズ 認知症の介護施設は今」にて堀田議長出演(7/14,15)
9月	NHK総合:「おはよう日本」にて町づくり事例検索ホームページサイト開設(堀田議長出演)(9/24) TBSテレビ:「みのもんたのサタデーずばッと」にて認知症サポーターの紹介(9/27)
11月	NHK総合:「ニュースウォッチ9/介護の日特集」にて「地域支援が大事」(長谷川幹事出演)(11/11)
1月	スカパー!医療福祉チャンネル 774にて、昨年度の報告会映像を放映(毎週月・火・日曜)

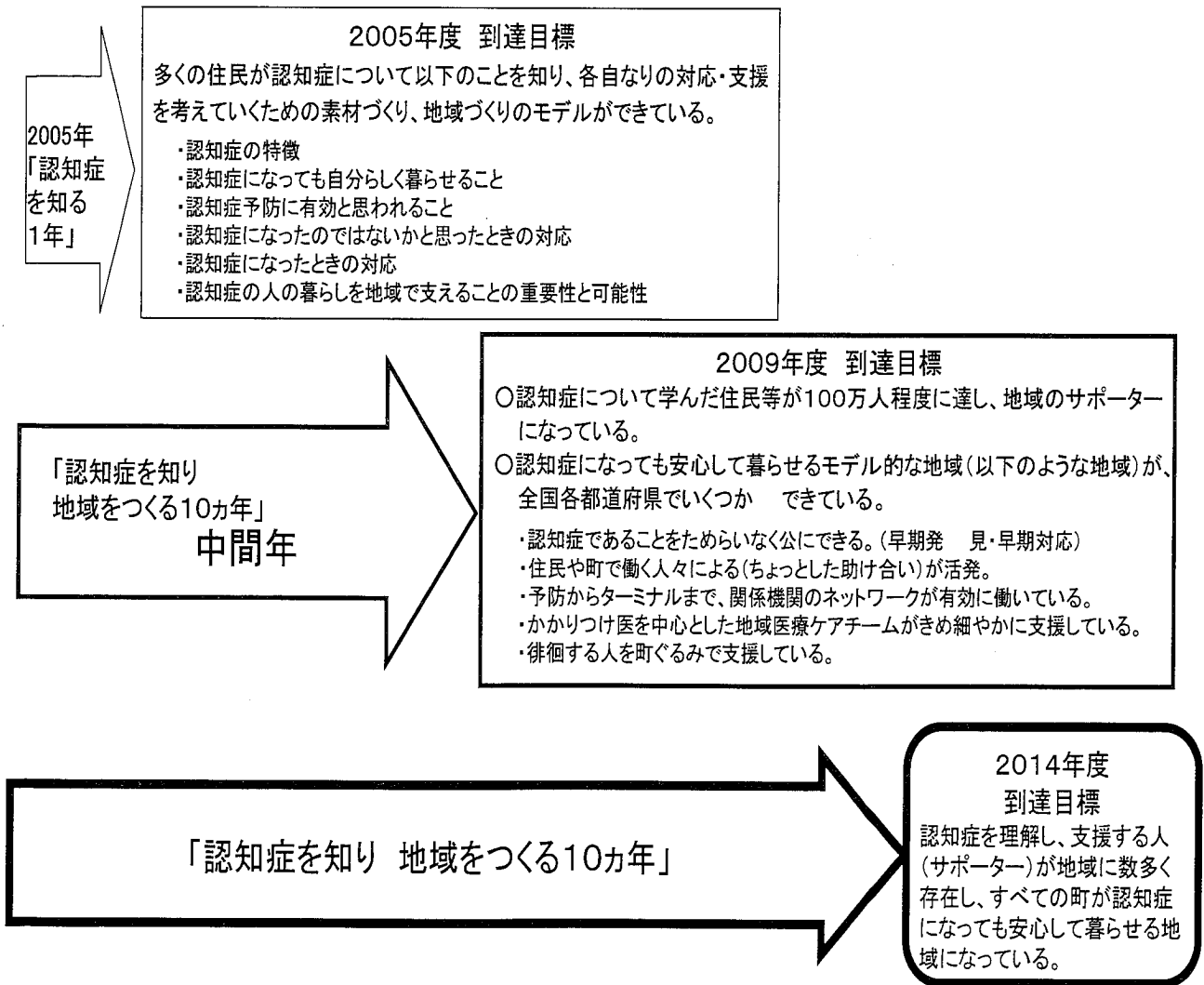
V. 資料

1. 「認知症を知り 地域をつくる10ヵ年」の構想

【「認知症を知り 地域をつくる10ヵ年」の構想】

(平成17年4月の厚生労働省資料を基に作成)

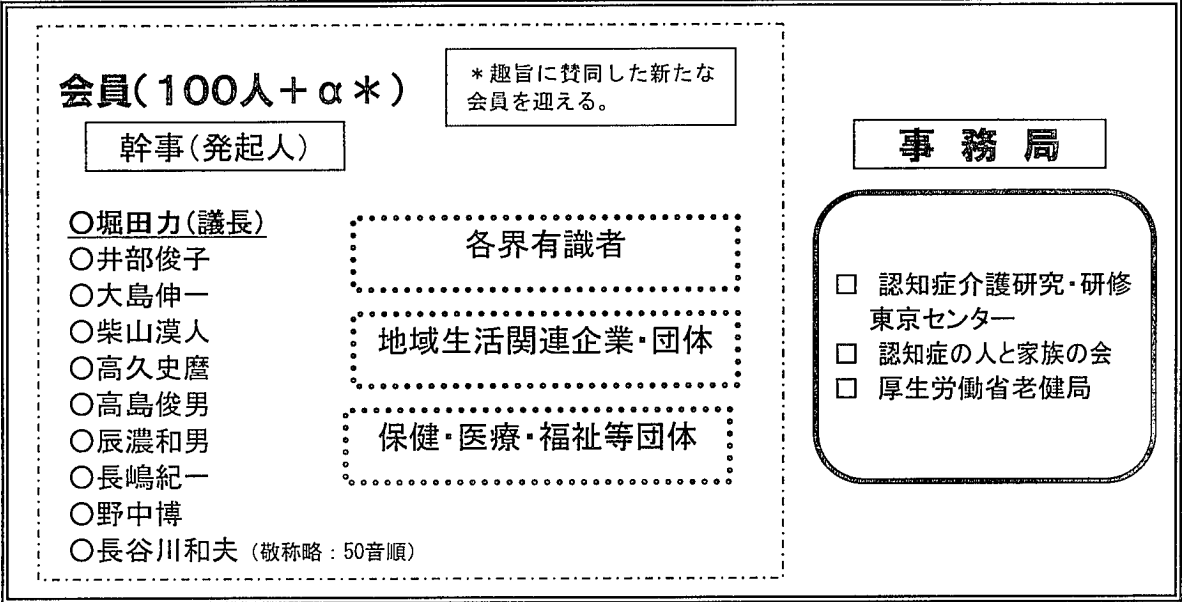
2005年4月スタート



2. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議の趣旨・役割

「認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議」は、厚生労働省が提唱する「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの趣旨に賛同し、その推進を応援する民間の個人や団体を中心とした運動体である。

具体的な役割は、メンバーそれぞれの立場を活かしながら、認知症に関する知識や情報の普及、認知症になっても暮らし続けられる地域づくりを応援することなどである。



3. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議会員一覧

平成21年3月末日現在(敬称略、50音順)

幹事 (発起人)	井部俊子(検討会委員・聖路加看護大学長)、大島伸一(国立長寿医療センター総長)、 柴山漠人(認知症介護研究・研修大府センター顧問)、 高久史麿(検討会委員・自治医科大学長)、高島俊男(検討会委員・エッセイスト)、 辰濃和男(検討会委員・エッセイスト)、長嶋紀一(日本大学文理学部教授)、 野中 博(検討会委員・医療法人社団博腎会 野中医院 理事長)、 長谷川和夫(検討会委員・認知症介護研究・研修東京センター長)、 堀田 力(議長:「痴呆」に替わる用語に関する検討会委員・さわやか福祉財団理事長)
計 10 名	
各界有識者	足立 啓(和歌山大学システム工学部教授)、生島ヒロシ(キャスター)、 永 六輔(放送タレント)、大熊由紀子(国際医療福祉大学大学院教授)、落合恵子(作家)、 小室 等(ミュージシャン)、高野範城(日本弁護士連合会 高齢者・障害者の権利に関する委員会委員長)、立松和平(作家)、羽田澄子(映画監督)、日野原重明(聖路加国際病院理事長)、 松井久子(映画監督)、村田幸子(福祉ジャーナリスト)、横森美奈子(ファッションデザイナー)、 吉行和子(女優)
計 14 名	
地域生活 関 連 企 業・団体	社団法人 高層住宅管理業協会、全国医薬品小売商業組合連合会、全国銀行協会、 全国公団住宅自治会協議会、全国高等学校長協会、全国石油商業組合連合会、 全国農業協同組合中央会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、電気事業連合会、 社団法人 日本観光協会、社団法人 日本ガス協会、日本商工会議所、 社団法人 日本水道協会、日本生活協同組合連合会、日本製薬団体連合会、 社団法人 日本セルフ・サービス協会、社団法人 日本専門店協会、 財団法人 日本博物館協会、社団法人 日本フランチャイズチェーン協会、 社団法人 日本ボランティア・チェーン協会、日本労働組合総連合会
計 22 団体	
保健・医療 ・ 福 祉 系 等団体	介護相談・地域づくり連絡会、玩具福祉学会、高齢社会 NGO 連携協議会、 NPO法人 高齢社会をよくする女性の会、国際長寿センター、 社団法人 コミュニティネットワーク協会、財団法人 さわやか福祉財団、 社団法人 シルバーサービス振興会、社団法人 成年後見センター・リーガルサポート、 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター、 全国在宅介護支援センター協議会、全国市長会、社会福祉法人 全国社会福祉協議会、 全国知事会、特定非営利活動法人 全国認知症グループホーム協会、全国町村会、 全国マイケアプラン・ネットワーク、全国民生委員児童委員連合会、 財団法人 全国老人クラブ連合会、全国老人デイ・ケア連絡協議会、 社団法人 全国老人保健施設協会、宅老所・グループホーム全国ネットワーク、 社団法人 長寿社会文化協会、社団法人 地域医療振興協会、社団法人 日本医師会、 社団法人 日本ウオーキング協会、日本介護支援専門員協会、社団法人 日本介護福祉士会、 社団法人 日本看護協会、日本言語聴覚士協会、日本ケアマネジメント学会、 社団法人 日本建築学会、日本公証人連合会、日本高齢者虐待防止学会、 日本高齢・退職者団体連合、有限責任中間法人 日本在宅介護協会、 社団法人 日本作業療法士協会、社団法人 日本歯科医師会、社団法人 日本社会福祉士会、 日本精神衛生学会、社団法人 日本精神科病院協会、日本成年後見法学会、日本赤十字社、 日本認知症ケア学会、社団法人 日本薬剤師会、社団法人 日本理学療法士協会、 日本療養病床協会、日本労働者協同組合連合会、日本老年看護学会、日本老年精神医学会、 社団法人 認知症の人と家族の会、福祉自治体ユニット、財団法人 ぼけ予防協会、 有限責任中間法人「民間事業者の質を高める」全国介護事業者協議会
計 54 団体	

※社団法人日本経済団体連合会から本キャンペーンにご協力をいただいています

合計:100 団体・個人

4. 認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議

会員、専門協力員、推進協力自治体 参加リスト（当日予定）

（敬称略、50音順）

■幹事

柴山 漢人	医療法人晴和会 あさひが丘ホスピタル 名誉院長
長谷川 和夫	認知症介護研究・研修東京センター長
議長 堀田 力	さわやか福祉財団 理事長

■各界有識者

足立 啓	和歌山大学システム工学部 教授
村田 幸子	福祉ジャーナリスト

■地域生活関連企業・団体

全国公団住宅自治会協議会	代表幹事 渡辺 志げ子、 随員2名
日本生活協同組合連合会	福祉事業推進部 部長 山際 淳、 尾崎 靖宏

■保健・医療・福祉系等団体

国際長寿センター	理事長 森岡 茂夫、 大上 真一
財団法人 さわやか福祉財団	安部 博、 村上 卓郎、 宮沢 邦子
社団法人 全国老人保健施設協会	会長 川合 秀治
社団法人 日本歯科医師会	介護予防事業改正対応WT座長 桜庭 幸夫、 地域保健課 課長 伊丹 晴彦
日本労働者協同組合連合会	組織総務部 林 多恵子
社団法人 認知症の人と家族の会	副代表理事 勝田 登志子

■専門協力員

旭 俊臣	（医）弥生会 旭神経内科リハビリテーション病院 院長
玉井 顯	医療法人敦賀温泉病院 院長 （随員2名）

■推進協力自治体（市区町村コード順）

岩手県遠野市	遠野市地域包括支援センター 所長 佐々木 文友、 随員1名
秋田県横手市	福祉環境部高齢ふれあい課 主査 川越 修、 福祉環境部高齢ふれあい課 副主査 最上 克仁
滋賀県大津市	健康保険部健康長寿課 副参事 蓮井 敦
大阪府大阪市	健康福祉局高齢者施策部高齢福祉担当係長 松田 大

「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会
第5回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2008 発表会

報告資料

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
事務局 認知症介護研究・研修東京センター
2009年3月